

研究ノート

小田原藩竈新田村の報徳仕法について

—小林平兵衛と相続講—

仁 木 良 和

I はじめに

II 対象地の特徴

1. 竈新田村の概要
2. 小林家について

III 相続講と報徳仕法

1. 相続講の成立

2. 相続講（文化9年～弘化2年）

3. 報徳仕法

4. 相続講（弘化3年～文久元年）

IV おわりに

I はじめに

報徳仕法の実証的研究については、関東各地での事例が報告されており、本稿であつかおうとする小田原藩においても、すでに多くの研究がなされている¹⁾。ここで、さらに屋上屋を架すが如き研究をおこなおうとするのは次の理由による。

第一に、報徳仕法が導入される場合に、それ以前におこなわれていた講や無尽などとの関係が考えられるが、竈新田村には、小林平兵衛によって始められた相続講という組織があったということである。

第二に、小田原藩の報徳仕法は、弘化3年（1846）の藩の中止命令によって幕を閉じたと言われており、従って小田原藩における報徳仕法の研究の大部分²⁾は、弘化3年までで終わっている。しかし、御殿場地方では、仕法廃止後もいくつかの村々で一村仕法として継続し、明治以後の報徳社の母胎となっていく例がみられるという³⁾。だが、その実態は明らかにされていない。この点、竈新田村では、仕法廃止後、相続講が形をかえながら報徳仕法を継承しているということである。

第三に、一般に報徳仕法が普及する以前に

は、心学運動がおこなわれた地域が比較的多かったと言われている⁴⁾。当村の仕法推進者であった小林平兵衛⁵⁾（安永8年～嘉永2年

1) 今までの報徳仕法についての研究成果を詳細に論じたものに大藤修氏の「戦後歴史学における尊徳研究の動向」（二宮尊徳生誕二百年記念事業会報徳実行委員会編『尊徳開顕』有隣堂、1987年）がある。特に、第二章、尊徳仕法の性格をめぐって、は、各地の仕法研究の成果を的確に整理されており、有益である。

2) 小田原藩の報徳仕法の研究については、上記論文の215～216頁を参照ねがいたい。

3) 『御殿場市史』第8巻（通史編上）、497頁。（以下『市史』と略記）

4) その思想史的意義については、逆井孝仁『仁政』から『民富』へ（週刊朝日百科『日本の歴史』91号、朝日新聞社、1988年）を参照。また、大藤修「関東農村の荒廃と尊徳仕法」（『史料館研究紀要』14号、1982年）には、谷田部落における実証的研究がなされている。

5) 小林平兵衛については、『市史』8巻の481～492頁を参照。また、高橋敏『日本民衆教育史研究』（未来社、1978年）の第三章・第四章には、平兵衛によってこの地方に導入された心学について論じられている。また、芹澤伸二「江戸時代民衆の文芸活動」（『日本私学教育研究所 紀要』22号、1986年12月）には、当地方の俳諧との関連で小林平兵衛（木二）をあつかっている。また、拙稿「北駿地方の心学について」（逆井孝仁教授還暦記念会編『日本近代化の思想と展開』文献出版、1988年）も心学について論じた

1779～1849)も、文政年間から熱心な心学者として活躍していたが、天保8年(1837)に二宮尊徳が当地方を廻村して以後は、報徳運動の指導者として活躍することである⁶⁾。

以上の理由から、竈新田村を事例として報徳仕法が如何なる形で展開したのかを明らかにしていきたい。

Ⅱ 対象地の特徴

1. 竈新田村の概要

竈新田村は、現在静岡県御殿場市の一部であり、かつては小田原藩大久保加賀守の藩領であった。村高は、貞享3年(1686)に160石7斗あまりで、田方が約7町8畝歩、畑方が約20町2反歩、野畑が約19町2畝歩である⁷⁾。その後、文化15年(文政元年・1818)の「田方仕附反歩書上帳」⁸⁾によれば、村高が198石3斗あまりで、田方が約8町9反歩、畑方が約22町9反6畝歩、野畑が約19町2反8畝歩、茶畑が4町歩ほどで、基本的には畑方中心の村であると言える。また、村内は上宿・下宿・払堰・和新田——上新田とも書く——の4つの地区に分けられ、和新田と払堰は農業を主とし、上宿・下宿の宿地区は沼津・三島～甲州の街道に沿っていることから、農閑期には行商的な商業をしていた、と言われている⁹⁾。

次に、農業生産の実態をみてみよう。天保10年(1839)の「報徳金御拝借貸附帳」¹⁰⁾に「当村之儀者至而地味悪敷故、畑方者古より茶之木或者紙楮等植置、右之田畑作立繁栄致居候得共、三拾年以来自然と茶之木枯、連々村柄衰へ…」とあるように、米や麦、蕎麦などの穀類以外には、茶と楮が作られていた。

楮や三楮はかなり初期から畑地の多い村々で栽培されており、特に当新田では「楮木凡拾ヶ村ニもかけ合候程」¹¹⁾で、はぎ皮にして立野や修善寺の紙屋に販売し、年貢の足しにもしていたと言われている。また、竈新田村には16軒の釜主がおり、川嶋田・杉名沢・佐野の3カ村の釜主とともに近隣の村々から楮や三

楮を買い集め、独占的に出荷していた。出荷量のわかる安永4年(1775)から同5年にかけては、竈新田村が135駄(4050貫)で、他の3カ村は合計で54駄(1620貫)にすぎず¹²⁾、当新田村においてはかなり重要な産業であった。従って、この独占を破ろうとする外部からの動きにはきわめて敏感に反応し、元禄15年(1702)以来数回にわたって争いが生じている。だが、単なるはぎ皮として出荷するだけでは外部との競争に対応できず、また安永4年の史料には、富士郡の大淵村から大量のはぎ皮が出荷されるようになり迷惑しているとの記述もあり¹³⁾、天保期には、当地方の楮・三楮の栽培は継続しているものの、その量は多くなく、発展はみられなかったと言われている¹⁴⁾。この点、平兵衛の『日記』¹⁵⁾によれば、

ものである。また、平兵衛の活動については、御殿場市総務課市史編さん係の「小林平兵衛年譜」を大幅にあらためて、『年譜』を作成したが、今回は紙幅の関係で掲載できなかった。今後、何らかの形で発表したい。なお、この『年譜』の作成によって、今まで心学の当地方への導入を文政10年の菊池良貞によるものといわれていたが、文政6年の曾根直次郎(守愚)によるものが最初であることがわかった。

6) しかしながら、本稿では、平兵衛の心学から報徳への移行の問題はあつかっていない。それについては別稿を用意したい。

7) 『市史』3巻、665頁。

8) 竈区有文書。土地・租税34。

9) 渡辺好洋『奥住新左衛門』(電報徳社、1984年)29～31頁。

10) 小林家文書、補193。左の数字は、『御殿場市史資料所在目録』の整理番号である。小林家文書は、3部からなり、第2部は「補遺」、第3部は「追加」とあり、ここでは第2部を補1・補2のように記し、第3部を追1・追2と記し、第1部を正1・正2のように記す。以下、番号だけのものは小林家文書である。

11) 『市史』3巻、708頁。

12) 『市史』8巻、291頁。

13) 『市史』3巻、710頁。

14) この部分、『市史』8巻の288～292頁を参照した。

15) この時期の平兵衛の日記には、「文化九年略日記」(正12)、「文化十年略日記」(正

文化9年の1月には立野で値立てをし、同10年の1月にも立野から修善寺をめぐっており、さらに同11年の1月にも立野で値立てをしていることから、この当時、小林家では相変わらず、はぎ皮をしていることが知られる。さらに、文政6年の3月には、中野嶋の玉川堂で「唐紙漉申候」とあり、また、平兵衛没後の安政5年(1858)には、子の七代目惣右衛門が江戸小石川の和製唐紙漉師玉川堂左吉に20両の入門金を支払って和製唐紙の漉方を口伝されており¹⁶⁾、単にはぎ皮として出荷するのみでなく製紙の技術導入をはかっていたように思われる。しかし、これがどれほどの成果をあげたのかを示す史料はないが、「明治7・8年普通物産・特物産表」¹⁷⁾には、楮が720貫とあり、安永年間と比較しても相当衰退していたのではないかと推測される¹⁸⁾。

次に、茶の栽培については、当村には茶畑が4町歩ほどあり、また、天保13年(1842)の「産物諸品値下げ書上帳」¹⁹⁾によれば、茶は養・馬沓・縄・薪とならんで当村の産物としてあげられており、ある程度の生産がみられる。しかし、平兵衛の「文化十年 略日記」²⁰⁾の2月22日の項に「朝、中晴速々ノ寒雪ニ而茶の木かかる事甚敷也。依五人組御役人中立合茶園見分仕候。小田原表^(而脱力) 済与申趣相極所々見廻り也。」とあり、当地方が高冷地にあることもあり、気候に左右されやすい状態にあったようである。ここでも、幕末期の茶の生産の実態を示す史料を欠くのであるが、前掲の「物産表」では、茶生葉が166貫あるものの製茶は0となっており、また茶畑も4町歩ほどにすぎず、幕末期においても商品作物としてそれほど大きな意味をもつとは思えない。

さらに、他の作物として養蚕があげられる。先の『日記』によれば、文化9年の5月14日に茱萸沢村の㊤(あわやか)で桑を買っており、翌10年の6月3日には「蚕まへ売、5斗9升ニ而1両2分」とあり、また文政6年の5月

表-1 嘉永3年年貢納高

納 米	戸 数
15俵～20俵	1 戸
10 ～15	0
5 ～10	1
3 ～5	2
1 ～3	14
1 以下	28
合 計	46 戸

出典)『御殿場市史別巻Ⅱ』より作成。

注、寺・入作は除いた。

全戸数は86戸。

表-2 明治3年当村持高

持 高	戸 数
40石～50石	1 戸
20 ～30	1
10 ～20	2
5 ～10	3
1 ～5	33
0.5 ～1	23
0.5 以下	23
不 明	7
合 計	93 戸

出典)「明治3年、宗門人別帳」(龜区有文書、村制267)より作成。

にも「蚕上り30枚斗」などとあり、小林家で養蚕をおこなっていたことがわかる。当地方の養蚕は、安永3年(1774)に養蚕についての申し渡しが行なわれ、さらに文化5年には茱萸沢村の繭が8両分藩主によって買い上げら

13)、「後の用事、文政六年」(正18)がある。毎日の覚え書のようなものであるが、平兵衛の活動や心学者との交遊など知るには貴重である。以下、本文では、特に記述する必要のない場合には、三冊をまとめて『日記』と記す。

16)「為取替申議定証文之事」, 補264。

17)『市史』5巻, 巻末表。

18)『市史』8巻によれば、むしろ明治10年代以後、発展していくようである(739～740頁)。

19)『市史』2巻, 823頁。また『市史』8巻, 465～466頁。

20) 正13。

表-3 小林家土地集積

(単位, 畝・歩)

	竈新田村			茱萸沢村			駒門新田村		
	田方	畑方	野畑	田方	畑方	野畑	田方	畑方	野畑
元禄元 (1688) ~ 同11 (1700)	27.16	39.6	40.22 ¹⁾						
宝永 7 (1710)	"	"	" ²⁾						
享保 5 (1720)	"	"	44.10 ³⁾						
" 15 (1730)	35.10	81.6	47.28 ⁴⁾						
元文 5 (1740)	73.10	86.26	54.13 ⁵⁾						
寛延 3 (1750)	100.2	105.8	74.26 ⁶⁾						
宝暦 10 (1760)	"	163.18	81.27	11.20					
明和 7 (1770)	"	173.20	130.29	"			16.14		
安永 9 (1780)	111.26	181.22	150.17 ⁷⁾	"			35.28		13)
寛政 2 (1790)	152.7	216.11	249.27 ⁸⁾	"			36.16	5.14	
寛政 12 (1800)	186.12	246.19	" ⁹⁾	"			44.2	"	
文化 7 (1810)	192.25	268.1	287.2 ¹⁰⁾	36.19	210.10	11.14 ¹²⁾	70.0	"	2.1 ¹⁴⁾
文政 3 (1820)	195.2	271.7	" ¹¹⁾	40.4	267.12	26.12	76.0	"	"
天保元 (1830)	201.0	279.11	294.16	"	238.22	14.28	64.20	16.5	"
天保 11 (1840)	193.2	"	"	"	165.8	"	61.10	"	"
嘉永 3 (1850)	"	"	"	16.27	90.28	0	"	2.0	0 ¹⁵⁾
万延元 (1860)	193.22	"	"	"	66.28	"	"	"	"
明治 3 (1870)	217.12	"	"						
	萩蕪村		大坂村		沼田・中清水, 新橋・桑木・吉久保・二枚橋				
	田方	畑方	田方	畑方	田方	畑方	野畑		
元禄元 (1688) ~ 同13 (1700)								出典)「田方控帳」 (補131)より作成。 10年ごとにその時点 での所持反別を示し たものである。茶畑 などは一併毎にあげ た。 注1) 他に屋敷4畝。 20歩 2) 他に芝沢1カ所 3) 他に茶畑3畝10歩 4) 他に芝田1カ所 5) 他に林2カ所 6) 他に林2カ所, 茶畑6畝歩, 屋敷 1畝10歩 7) 他に屋敷2畝歩 8) 他に林1カ所, 茶畑1畝10歩 9) 他に茶畑2反4 畝5歩 10) 他に茶畑3畝6 歩, 野畑1枚 11) 他に無畝田1カ 所, 芝地1カ所 12) 他に無畝田1枚 13) 他に林1カ所 14) 他に林1カ所と 茶畑2畝20歩 15) 他に林1カ所 16) 内, 田1畝15歩 ・畑7畝9歩は相 続講へ渡す。	
宝永 7 (1710)									
享保 5 (1720)									
" 15 (1730)									
元文 5 (1740)									
寛延 3 (1750)									
宝暦 10 (1760)					20.2				
明和 7 (1770)					"				
安永 9 (1780)					"				
寛政 2 (1790)					21.2				
寛政 12 (1800)					"				
文化 7 (1810)	23.27	7.17			"	12.0	15.0		
文政 3 (1820)	50.14	22.7	78.2		61.0	101.0	"		
天保元 (1830)	70.29	25.19	"		25.16	"	" ¹⁶⁾		
天保 11 (1840)	52.6	17.19	"		0	12.0	"		
嘉永 3 (1850)	44.6	1.6	0		"	0	0		
万延元 (1860)	32.9	"	"		"	"	"		
明治 3 (1870)									

れている²¹⁾。平兵衛の実家が茱萸沢村の名主江藤家であったことを考えれば、当新田にも養蚕をもちこんだことは当然考えられるのであるが、この時期養蚕の形跡はみられず、実際に養蚕が広まるのはやはり明治以降のことであろう。

以上のことから、幕末期の竈新田村は、楮・三桎の生産が衰退し、他の作物は今だ成長しておらず、後掲表一16にみられるように、米以外には唐黍・稗・蕎麦・粟などの穀作中心の農業経営がおこなわれていたように思われる²²⁾。

次に、村内の階層についてみておきたい。当村には、幕末期の「人別帳」や「名寄帳」が欠けており、具体的に、それを示すことはできないが、天保7年(1836)から嘉永3年(1850)にかけて6カ年分の「御年貢正米取立帳」²³⁾があり、その概要をみておきたい。凶作による天保7・8年を除くと、あとの4カ年分の納米にはほとんど変化がみられないので嘉永3年のものをあげておくと表一1のようになる。最高は18俵を納める小林家で、次が9俵を納める名主の清五郎、あとは3俵半を納める利兵衛、3俵の久左衛門とつづく。この表で見る限り過半数が1俵以下の者であることがわかる。次に、この表と比較する意味で明治3年の当村農家の持高を示したのが表一2である。47石8斗をもつ小林家が群をぬき、次が20石6斗をもつ久左衛門、11石6斗をもつ清五郎、10石8斗をもつ利十郎とつづく。圧倒的多数が5石以下であり、一握りの上層農民と多数の下層農民が対峙するという図式が考えられる。嘉永3年と明治3年を比較すると、20年を経過しているものの、幕末から明治初期にかけては大体同じような状態ではなかったかと推測される。

2. 小林家について

小林家は、竈新田開発者であった奥住新左衛門が寛永年間(1624~1643)に信州から当

地方に移り、竈新田の開発をおこなった際に、叔父であった新左衛門とともに当村の開発をおこなった小林三兄弟のうちの安兵衛家の分家にあたり²⁴⁾、元禄年間(1688~1703)に和新田に住するようになった。この時に、1町2反7畝12歩²⁵⁾の土地を分地されており、それ以後、小林家は和新田地区を中心に経営を拡大していく。

まず、小林家の土地集積の状況をみておこう。表一3をみるとわかるように、小林家は竈新田村においては、享保期から寛政期にかけて土地を拡大していく。特に、小林家には天明期の質流地証文が最も多く残されており、また後に平兵衛が「天明飢饉之度々仕出し候身代」²⁶⁾と述べているように、この時期に急速な土地集積がおこなわれた。この時期、安永年間の不作につづいて天明2年(1782)の地震の影響もあって当地方の村々は疲弊した状態にあったにもかかわらず、小田原藩では財政窮迫から年貢の先納を申し渡しており、一層困難な状態におかれていた。竈新田村でも、天明3年に年貢の減免要求を出す、藩でも出費がかさなり、借金も増えるばかりで「呉々皆共難儀之筋幾重ニも相察居候得共、何を申も物の不足より□り候事ニ候得ば、御届不被成候」²⁷⁾という回答で、結局減免はな

21) 『市史』8巻, 285頁。

22) 明治期の竈新田村を研究された筒井正夫氏も明治10年ごろまでは、「商品作物としての性格の強い三桎は750貫、養蚕も収繭高3貫余と、この時期にはいまだネグリジブルな存在に止っていたといえよう。」とのべられている。〔部落共有金穀の運用と名望家支配(1)〕、『彦根論叢』第236号, 1986年, 66~67頁。)

23) 『市史』別巻Ⅱ, 596~601頁。

24) 『市史』8巻, 146~154頁, 482~486頁。

25) 「田畑万議帳」補143。なお、後掲表一3では、田畑あわせて1町1反2畝4歩で、1反5畝8歩の誤差が生じる。これは、表一3作成のもとにした「田畑控」には、「返上」・「改」によって書きなおしがなされていることによる。

26) 「書簡(自家仕法差図出願)」追13。

27) 『市史』3巻, 716頁。

表-4 作 德 米 金 収 入

文 政 12			文政13 (天保元)			天 保 2		
俵・斗・升			俵・斗・升			俵・斗・升		
竈 新 田	13. 1. 2	(他に2分2朱)	7. 0. 0			7. 3. 2		
茱 萸 沢	58. 0. 8		56. 1. 8	(他に粃2石8斗)		53. 3. 5	(石代2分2朱)	
駅 門 新 田	51. 3. 2	(他に粃1石4斗, 2分2朱)	49. 1. 4			66. 3. 5		
萩 蕪	1. 3. 4		1. 3. 0			1. 3. 0		
大 坂	14. 2. 0		16. 0. 0	(他に1分と錢612文)		11. 0. 0	(石代3両3朱と 276文)	
沼 田 他	30. 0. 4		18. 1. 3			12. 3. 0		
千・本・竹	11. 0. 0		7. 0. 0			9. 0. 0		
合 計	180. 3. 0		155. 3. 5			163. 0. 2		
畑 両・分・朱			両・分・朱			両・分・朱		
茱 萸 沢	6. 3. 2	(他に大豆4俵)	5. 3. 2	(他に大豆4俵)		5. 2. 2	(他に大豆4俵)	
沼 田 他	4. 1. 3	(他に錢500文)	7. 0. 3	(他に錢500文)		5. 2. 2	(他に錢500文)	
千・本・竹	1. 0	(他に錢200文)	1. 0	(他に錢200文)		1. 0		
駒 門 新 田			1. 2	(他に錢100文)		1. 2	(他に錢200文)	
天 保 3			天 保 4			天 保 5		
俵・斗・升			俵・斗・升			俵・斗・升		
竈 新 用								
茱 萸 沢	53. 1. 0		15. 1. 2			55. 2. 0		
駅 門 新 田	60. 3. 4		21. 2. 2			59. 0. 0		
萩 蕪								
大 坂								
沼 田 他								
千・本・竹								
合 計	114. 0. 4		36. 3. 4			114. 2. 0		
畑 両・分・朱			両・分・朱			両・分・朱		
茱 萸 沢	3. 0. 0	(他に大豆4俵)	3. 2. 0	(他に大豆1俵2斗)		5. 2. 2	(他に大豆4俵)	
沼 田 他								
千・本・竹								
駒 門 新 田	2. 2	(他に錢400文)	2. 2	(他に錢200文)		2. 2	(他に錢100文)	

天 保 6			天 保 7			天 保 11		
俵・斗・升			俵・斗・升			俵・斗・升		
竈 新 田						60. 1. 2		
茱 萸 沢	30. 2. 2		9. 1. 4					
駒 門 新 田	33. 2. 2		16. 3. 1			30. 2. 9		
萩 蕪						10. 2. 1		
大 坂						8. 2. 9		
沼 田 他								
千・本・竹								
合 計	64. 0. 4		26. 0. 5			110. 1. 1	(他に利足米20俵3斗2升)	
畑	両・分・朱		両・分・朱			両・分・朱		
茱 萸 沢	4. 3. 2	(他に大豆4俵)	3. 0. 1	(他に大豆4俵)				
沼 田 他								
千・本・竹								
駒 門 新 田	2. 2	(他に200文)	2. 0	(他に100文)		2. 0	(他に銭100文)	
竈 新 田						1. 2. 1	(他に銭260文)	

天 保 12			嘉永7 (安政元)		
俵・斗・升			俵・斗・升		
竈 新 田	50. 1. 1		53. 2. 5		
茱 萸 沢			14. 1. 1		
駒 門 新 田	25. 0. 3		36. 0. 7		
萩 蕪	8. 3. 7				
大 坂	5. 3. 7				
沼 田 他			8. 3. 2	(萩蕪村カ)	
千・本・竹					
合 計	90. 0. 8	(他に利足米20俵)	112. 3. 5		
畑	両・分・朱		両・分・朱		
茱 萸 沢			1. 2. 2	(他に大豆2俵・銭600文)	
沼 田 他					
千・本・竹					
駒 門 新 田	?		2. 0	(他に銭500文)	
竈 新 田	?		?		

出典) 文政12年から天保7年までは「④作米金控帳」各年度(補146他)より作成。天保11年は「家政取調帳」(補203), 同12年は「田畑小作米金取調帳」(補211), 嘉永7年は「田畑小作米金取調帳」(補259)より作成。

注 作徳米・利足米の区別はしていない。千・本・竹は, 千福村本宿村・竹原村にあたり利足米

出典) 文政12年から天保7年までは「④作米金控帳」各年度(補146他)より作成。天保11年は「家政取調帳」(補203), 同12年は「田畑小作米金取調帳」(補211), 嘉永7年は「田畑小作米金取調帳」(補259)より作成。

注 作徳米・利足米の区別はしていない。千・本・竹は, 千福村本宿村・竹原村にあたり利足米か。

表-5-1 小林家金銭貸借(貸付)

文政11年(1828) 7月現在				天保7年までの返 済額			文政11年(1828) 7月現在				天保7年までの 返済額		
	両・分・朱	銭文	その他	両・分・朱	文	その他		両・分・朱	文	その他	両・分・朱	文	その他
永 久 金	44.2.2	1012	銀2匁5分				仁 杉村		700				
							一 色 //	3.0			3.0		
貸 付 金							吉久保 //	7.3.0	100		2.0.0		
村 内	23.0.3	2787		19.2.0	2111		竹之下 //	2.0.0		銀3匁2分			
柴 怒 田 村	1.2	200					深 良 //	1.0.0		銀5匁2分			
中清水 //	20.1.2	1343	米4俵	5.0.0	200	米4俵	久 根 //	20.0.0					
神 場 //	4.0.2	334		4.0.2	334		土 倉 //	5.0.0			5.0.0		
保土沢 //	1.0.2	1235			325		竹 原 //	26.2.2	132				
駒門新田 //	7.0.0	642		5.3.0			本 宿 //	51.2.0			39.2.0		
大 坂 //	1.0		米2俵			米2俵	徳 倉 //	4.3.0					
中 山 //			銀1匁 種粃8斗 ・銀6匁 5厘	1.2.0		銀1匁	千 福 //	25.0.0			5.0.0		
萩 蕪 //	12.0.2	712					神 山 //	1.3.0					
新 橋 //	1.3.1	100		1.3	100		公文名 //	1.0.0					
諸久保 //	2						不 明	1.0.0		銀2匁2分			
二枚橋 //	1.3.3	677	米1俵	1.0.1			小 計	297.3.2	236	銀29匁1 分5厘, 米7俵, 粃8斗	118.1.3	95	銀5匁 米6俵
深 沢 //	5.0.0			5.0.0			(他国)						
桑 木 //	10.0.0			10.0.0			上 谷 村	2.3.2	224				
御殿場 //	20.3.3	448		4.3.2			新 倉 //	4.0.2	160				
西田中 //	7.1.0	348					小田原宿	2	100		2	100	
黄茱沢 //	4.2.0	136		1.0.0			矢 倉 沢			銀9匁5分			銀9匁 5分
杉名沢 //	7.3.0		銀4匁	7.2.0		銀4匁	小 計	7.0.2	484	銀9匁5 分	2	100	銀9匁 5分
川嶋田 //	3.1.0	86	銀5匁				合 計	305.2.0	720	銀8匁6 分5厘, 米7俵, 粃8斗	118.2.1	195	銀14匁 5分, 米6俵
萩 原 //	10.0.0	29											
大 堰 //	5.0.0												
須 走 //	1.3.2	427											
北久原 //	1.0												

出典)「万控帳」(補144)より作成。1両=6貫800文で計算。

注 村内は、史料には86両2分2朱と5貫808文とがあるが、数枚かけており計算では上記の通りである。
合計には永久金を含めていない。

表一5-2 小林家金銭貸借（借入）

文政11年（1828）7月現在			天保7年までの返済額		
	両・分・朱	銭文		両・分・朱	文
預り金					
平左エ門	5.2.0		竈下宿 文化14正月改		
おふせ	2.2	358	大坂、文政2. 2月	2.2	358
おつ	1.2.2	27	御殿場、文化5. 7月	1.2.2	27
定右エ門	4.2.0		竈和新田 文政3・文政6		
五郎右エ門	5.0.0		// 文政5. 12.5		
//	3.3	249	// 文政10		
玄清寺	10.0.0		竈 文政6. 2.23	10.0.0	
彦八	1.0.0		竈和新田 文政10改		
おきち	1.0		竈中宿 文政9. 5.21		
茂八	5.2.1		内 文政10. 改	5.2.1	
相続講	9.1.0	672	竈和新田 文政11. 2月改	9.1.0	672
七兵衛	1.1.0		// 文政11.2.29		
永蔵	2.0	503	竈松 子（文政11）改	2.0	503
五兵衛	2.0	569	二子村	2.0	569
合計	46.2.0	2378		28.0.1	2129
借用金					
権右エ門	30.0.0		二子村 文政7.12.3	30.0.0	
峠（日野屋）	100.0.0		御殿場（太兵衛、惣兵衛、嘉七）文政8.11	100.0.0	
八郎右エ門	25.0.0		印野村 文政9.11.4	25.0.0	
孫右エ門	25.0.0		莫柴沢 文政9.8.30	25.0.0	
//	15.0.0		文政11.1.2	15.0.0	
早掛講	6.1.0	220	竈 文政11.2	6.1.0	220
合計	201.1.0	220		201.1.0	220

出典）表一5-1と同じ

らなかった。従って、農民の中には、質流地証文に見られるように「連々御年貢等に差詰り我等所持之田地……質物ニ書入」れるという状態に立ちいたった者もあったと思われる²⁸⁾。他方、小林家は、先の楮や三桎の釜主の一人として参加しており、それによる収益があり、土地を集積していくものと思われるが、それを証明する史料は今のところ見つからず、今後さらに明らかにしていく必要がある。

小林家は、明和の頃から他村にも小作地を拡大し、平兵衛が養子となった文化・文政期にかけて最大に達する。特に、竈新田内にお

いては、天保元年（1830）に田方では約2町歩、畑方では2町8反、野畑で2町9反、その他茶畑など4反6畝歩を所持し²⁹⁾、先に述べたように当村では群を抜いた存在となっていく。

28) 天明3年には、当地方を中心に御厨一揆がおきており、28カ村が参加し、500名を下らない農民が参加したといわれる。その顛末は『市史』8巻、384～423頁を参照のこと。

29) 拙稿「前掲論文」で、竈新田村の田方を3町5反3畝10歩、畑方を1町4反8畝1歩、野畑を1町7反4畝3歩としたが、集計の誤りで、表一3の天保元年の時期のように訂正する。

次に、小作米の収入についてみてみよう。小林家では、文政12年から嘉永7年（安政元年）まで断続的に11年分の作徳米の収入がわかる（表-4）。ただし、この表には、文政12年から天保2年にかけて最大の小作地をもつ竈新田村の作徳米がわずかに10俵前後しかなく、天保3年から同6年まで記載がなく、さらに大坂村・萩蕪村の作徳米の収入も小作地にくらべて少ないことなど、疑問の点もあるが、大体の趨勢はつかめると思う。これを見ると、文政の末から天保のはじめにかけて大体170俵前後の作徳米が得られるのに対して、天保飢饉のあった天保4年から同7年にかけて、極端に減少していることがわかる。後にふれるように、この時期は小林家の経営の危機の時期にあたり、報徳仕法の導入の時期と重なる。また、天保期に入ると他村にあった小作地を手離しており、これも小林家の経営がしだいに苦しくなっていくことを示しているよう。

次に、小林家の金銭貸借についてみておこう。小林家には、金銭貸借を示す二つの史料がある。一つは、文政11年（1828）に平兵衛が家督を悴七代目惣右衛門に譲った際に、所持している財産を調べた「万控帳」と、天保8年（1837）に、各村との貸借関係を調べた「大宝恵」の二冊である³⁰⁾。これをもとにして小林家の金銭貸借をみていきたい。まず、文政11年の貸付の方からみると（表-5-1）、永久金として44両2分が計上されている。永久金は、天保8年の「大宝恵」には永金とかがかれており、項目に「利不参」とか「死去ニ付そのまま」という記述がみられることから貸付金がこげついたような状態になっているものと思われる³¹⁾。また、貸付金の合計約305両のうち天保7年までに回収しえたのは約118両ほどにすぎず、貸付金の返済が滞っていたことを示している。次に借入の方をみると（表-5-2）、預り金³²⁾と借入金にわかれる。預り金は、竈新田内のものが

多く、天保7年までに約半分が返済されている。借入金も金額も大きい、天保7年までに皆済している。ここにある御殿場の叶日野屋と茱萸沢の孫右衛門は、平兵衛が郡内方面へ米を売り出す時の商売仲間であり、商業上

30) 「万控帳」補144, 「大宝恵」補168。

31) この場合、永久金は何故生じるのかを示す史料はとぼしいのであるが、例えば、久根村に貸し付けた20両について——この貸し付けは文化11年におこなわれている——平兵衛は文化14年に、竈新田村名主安兵衛と茱萸沢村名主孫右衛門の世話により、小田原藩役人松尾佐久太と松国平治右衛門の両名を通じて次のような請求をおこなっている。この20両は、領主から先納金として久根村に申し付けられたものであるが、久根村でまかなうことができず、惣右衛門（平兵衛）から借用したものであるが、「元利共相滞候ニ付、其後度々及催促ニ候得共、断而□申今以相滞迷惑致候趣申出候。然ル処右久根村用立置候金子之儀者惣右衛門自分之金子ニ而者無之、村方之儀近年段々困窮ニ相成、領主ノ貸付置候納扱等右滞甚以難渋ニ付、右返上納之□法相建候様申付置候処、小前之内銘々沓草鞋等為作手当金ニ取斗右金子惣右衛門江取始末相任置候。其内用立候ニ付右様相滞候而者、村方者勿論拙者共迄迷惑致候間、依之得貴意候者、右金子之儀不通村方手段金之儀ニ而御座候得者、当暮此□江相納候口々端々差支不得止事村役人共ノ頻而難渋願出シニ付、此段及欠合候。」と久根村支配稲葉遠江守の役人松井庄左衛門宛に請求しているのであるが、それに対し次のような返書が来ている。先の先納金は久根村でまかなうことができず、惣右衛門から借用したものであるが、久根村以外でも他借でまかなったところもあって、「他借之分金主共彼是六ヶ敷申出、久根村之義茂右様之始末惣右衛門江面目無之、然ル連難及返済甚以迷惑至極之□是上数度申出候得共……主人勝手向必至与差支ニ付□今相断置申候。左候得者、久根村開済茂難申付□惣右衛門江甚以氣之毒ニ御座候得共、左様之差支故、主人勝手向返金当暮何□茂難及ニ付、乍氣之毒惣右衛門相□メ何連ニ茂年延ニいたし追々済方手段取斗申度奉存候。」（以上、「御状写」正16）とあって、その後、こうした請求をしたのかどうかかわからないが、元利金とも返済されず、天保8年の「大宝恵」には、「利足も一切不参」として永久金の内に入られている。

32) 「預り金」は、『日本国語大辞典』には、「あずけきん」の項目に、「特に近世では、利

表一6-2 小林家金銭貸借(借入)

天保8年(1837)現在				弘化2年までの返済額		
預り金	両・分・朱	銭文		両・分・朱	文	
定右エ門	2.2.0		竈和新田, 文政3			
酒屋(大坂)	2.1.2		大坂 天保3	2.1.2		
〃	2.2.0		大坂 天保7.1.20	2.2.0		
吉次郎母	2.0		御殿場 天保3.7.11			
心学講		440	天保7.3.2		440	
久左エ門	2.0		竈新田 天保3	2.0		
合 計	8.1.2	440		5.1.2	440	
借入金						
兵右エ門	10.0.0		日野屋 天保7	10.0.0		
清左エ門	10.0.0			10.0.0		
合 計	20.0.0			20.0.0		

出典)「大宝恵」より作成。

の取引に関係するものであろう。日野屋は、小田原藩の御用商人的地位を得て、後に平兵衛とともに報徳仕法の指導者として活躍する³³⁾。

次に、天保8年の貸借をみておきたい。表一6-1の貸付の方をみると、天保7年までに返済されなかった貸付金の一部が永久金にうつされたため、永久金が160両と増大しており、そのうち返済があったのがわずかに21両にすぎない。他方、貸付金の方は、文政11年にくらべて大きく減少し約136両であり、そのうち110両程が弘化2年までに返済され、かなり回収されている。平兵衛が、報徳世話人となり、報徳仕法を御殿場地方に積極的に推進していく背景には、貸付金が当地方のかんりの地域に広がっていることから、貸付金の安定的な回収をめざそうという目的もあったかもしれない。

次に、借入の方をみると(表一6-2)、預り金、借入金とも大きく減少しており、小林家の経営の規模の縮小が考えられる。

最後に、小林家の経営をみておきたいのだが、それを具体的に示すことのできる史料を

欠いている。ただ、小作米の販売と金銭の貸借を示す史料が文政11年から天保2年まで連続して4年分残されているので³⁴⁾、これを中心にみてみることにしたい。表一7をみるとわかるように、入金では小作米の販売収入と元利金の返済が大きな収入源になっていることがわかる。文政11年には135両中102両、文政12年には179両中108両、天保元年には148両中112両、天保2年には、小作米を120俵あまり残しているが98両中60両が小作米の販売収入と元利金の返済であり、この両者の比重が大きい。他方、出金の方では、無尽掛金と借入金の返済が大きいことがわかる。この

子をつけないで他人に金銭を貸すこと。」とあり、また、『国史大辞典』には、「預状」の項目の中に、「江戸時代に入っても、借用証文の上で預かり金としてあっても、実際に利子のつくものは、一般の金銭貸借として扱われた。」とあって、借入金とほとんどかわりないものと思われる。ここでは預り金が竈新田内に多いのであるが、毎年利子をつけており、借入金とほとんどかわりないものとしておきたい。

33) 『市史』8巻, 308~310頁。

34) 「(貸付帳)」補145。この史料は覚書的なもので表題がないが、『史料目録』の仮題をそのままあげておく。

表-7 小林家経営収支

文政11年 (1828)							
入 金				出 金			
	両・分・朱	銭文	そ の 他		両・分・朱	文	そ の 他
元利金返済	26.2.0	6778		年貢皆済	12.2.1	6618	
無尽落札	20.2.0			無尽掛金	19.1.3	1065	
小作米販売 ¹⁾	75.2.0		銀9匁	借入金返済	58.3.3	78	(利子共)
他	12.0.2	1000	銀3匁	米駄賃	2	1719	
合 計	135.2.2	978	銀12匁	薬代	4.0.0		
				貸付金	2		
				盆前割	1.1.3		
				払方助合	10.0.0		
				隠居分	1.1	108	
				清五郎渡し	1.2.0		
				平左エ門〃	3.2.0		
				他	3.1.2	1415	
				合 計	116.3.1	803	
				差 引	18.3.1	175	
文政12年 (1829)							
入 金				出 金			
	両・分・朱	文	そ の 他		両・分・朱	文	そ の 他
元利金返済	31.2.1	10403		年貢皆済	9.3.3	1957	
田地請返	31.3.0			無尽掛金	28.3.1	2111	
相続預り金	20.0.0			借入金返済	66.1.2		
無尽落札	5.0.1	406		貸付金	28.0.0		
小作米販売 ²⁾	76.3.0	232		相続講返金	10.0.0		
畑年貢	11.3.0	1284		盆前割	1.2.0	184	
他	3.3	126		見舞金	2	334	
小 計	179.2.1	551		米駄賃	2	1714	
前年度分 ³⁾	18.3.0	201		礼金	1.3.0		
合 計	198.1.1	752		甲蔵返金	6.1.0	220	
				他	3.3	624	
				合 計	154.3.1	344	
				差 引	43.2.0	408	

文政13年(天保元年)(1830)

入 金				出 金			
	両・分・朱	文			両・分・朱	文	
元利金返済	49.3.0	4669		年貢皆済	7.2.0	3097	
無尽落札	10.0.3	607		無尽掛金	33.3.0	2926	
田畑請返	15.0.0			貸付金	45.1.0		
小作米販売 ⁴⁾	62.0.0			借入金返済	32.1.0	100	
畑年貢	10.2.2	600		田地代	34.0.0		
小 計	148.1.1	776		見舞金	2.1.2	184	
前年度分 ⁵⁾	38.2.2	1974		米駄賃	1.0.3	1284	
合 計	187.1.1	200		盆前割	1.0.0	323	
				諸入用	3.0.1	748	
				相続講利足	2.0.0		
				合 計	163.2.2	162	
				差 引	23.2.3	38	

天保2年(1831)

入 金				出 金			
	両・分・朱	文			両・分・朱	文	
元利金返済	42.2.2	5272		年貢皆済	10.0.0	1946	
無尽落札	7.3.2	394		無尽掛金	28.1.1	1094	
田地請返	20.1.0			貸付金	35.2.0		
小作米販売 ⁶⁾	16.3.0	362		借入金返済	28.2.2		
畑年貢	10.0.2	100		盆前割	1.1.0	457	
他		348		米駄賃	2.1	903	
小 計	98.2.1	101		礼金他	1.2.0		
前年度分 ⁷⁾	23.3.3	2423		諸入用	3.2.0	182	
合 計	122.3.0	824		田地代	3.0.2	161	
				相続講利足	2.0.0		
				合 計	115.0.1	68	

出典)「(貸付帳)」(補145)より作成。

1 両 = 6 貫800文で計算

1) 151俵1斗7升

3) 史料のまま

5) 史料のまま

2) 161俵1斗7升(10両=21俵)

4) 136俵1斗5升(10両=22俵)

6) 162俵7升のうち、41俵3斗5升で120俵1斗2升のこり

7) 史料のまま

表を4年間通してみると、天保元年と同2年が単年度で赤字となるが、天保2年は小作米162俵中120俵余を残しており、これを販売すれば黒字となるだろうから、天保元年のみが、前年度分を加えなければ赤字になる。しかし、これも田地の34両が大きいので、小作米の安定的収入と貸付金の安定的回収がおこなわれるなら、比較的安定した経営を維持していくことが可能であろう。しかし、ここには、平兵衛がおこなっていたさまざまな商売、楮・三桮の販売や文政6年の江戸との往復によっておこなわれた椎茸販売など、これらがどれほどの収益をもたらしたのかわからないこと、また小林家の家計的支出も不明である点など考慮しなくてはならないが、やはり貸付金の回収と作徳米の販売収入が大きかったろうと思われる。実際、平兵衛は、文政11年に家督を譲った時の目録である「田畑万讓帳」³⁵⁾の中で、「文化十四年(1813)、(家督を——筆者注)請取り候節より段々不仕合打続、殊ニ愚不運故ニ而、貸金損毛又ハ田地ニ相掛利分金高ヨリ小作米利金米共減少仕候者、此段承知之上取斗専一之事ニ候。此五七年以前ハ物入用諸掛り、去ル酉(文政8年)之大凶作ニ付、凡百三十両余引込又蔵普請仕、是茂五拾両余相掛り候。」とのべており、やはり小作米と貸付金のしめる位置が大きかったのではないと思われる。従って、凶作によって小作米などの収入が減少すると小林家の経営は不安定になっていくのではないかと考えられる。天保の飢饉の際には、作徳米の収入は、天保4年に36俵、同6年に64俵、同7年に26俵と大きく減少してしまうこと、また貸付金も文政11年から天保7年にかけて約305両中118両しか回収されていないということからみて、この時期に小林家はかなりの経営危機に陥ったものと考えられる。そして、天保7年には、恠惣右衛門に譲った家督を再び平兵衛が預かり、家の再建をはかり、翌年、二宮尊徳が当地方の廻村をおこなうと、尊徳

から「天明飢饉之度ハ仕出し候身代者此度之飢饉必至与差詰り、難渋ニ陥り候儀者何之不思儀も無之、天之罪する処又者寒暑輪廻艸木禽獸之生滅ニ至迄同一ツなる次第、有之儘之義を有之ままニ御教示被成下」た平兵衛は、「是迄之所行逸々恐怖歎息仕、既ニ其砌家内之者共五人疫病相煩、弥以的中仕、天明度より蒔置し悪種此度実法候事、実ニ徹心魂御教諭之通善種ニ蒔替候外有之間敷」³⁶⁾と、これを境に熱心な心学者から、報徳仕法の指導者として活躍することになる。

Ⅲ 相統講と報徳仕法

1. 相統講の成立

ここでは、相統講の成立とその変化の過程を大きく二つの時期に分け、報徳仕法を間にはさんで述べてみたい。

相統講³⁷⁾は、文化9年(1812)に小林平兵衛によって和新田の住民18軒をもって始められた。その議定書³⁸⁾には、次のように述べられている。

議定書

一、今般相統講と唱ひ、連中之者永代子々孫々ニ至迄、無難安泰に今日を営み、銘々為報先祖父母の恩沢を、跡式堅固に可相守兼而相談之通、万端遂儉約以余力を月々晦日限草鞋八足亦者錢四拾八文宛無

35) 補143。

36) 前掲、追13。

37) 相統講は、現在は以下に述べるような機能を失ったが、戦後になっても継続され、現在も和新田地区で運営されている。史料は三箱におさめられ、各家持ちまわりとなっているようで、まだ整理されていない。従って、以下は、ただ相統講文書とのみ記す。また、相統講は、小林平兵衛によってはじめられたため、小林家文書の中にも多数見られる。ここで使用した史料は、文化9年から文久元年までの50年分であるが、50年をくぎりにまとめられたようで、各冊とも報徳仕法にならって『相統講金現量鑑』と表題がつけられている。

38) 「第壹番 相統講金現量鑑 従文化九壬申年二月至同十月」補126。

表-8 相 統 講

	18 軒 掛 銭		加 入 金		利 子		米 売 払 代	
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
文化9.2~9.10	1.2.2		10.0.0					
文化10 (1813)	1.2.0	99.6	25.0.0		1.2.0	93.7		
" 11 (1814)	1.2.0	70.5			5.0.2	22.7		
" 12 (1815)	1.2.0	100.6			4.1.0	57.8		
" 13 (1816)	1.1.2	107.4			4.1.0	110.9		
" 14 (1817)	1.0.2	32.3			4.1.2	62.9		
文政元 (1818)	3.0	117.6			4.1.2	107.3		
" 2 (1819)	1.1.2	101.5			4.1.2	120.8		
" 3 (1820)	2.2	30.9			4.2.0	90.3		
" 4 (1821)	1.0.2	17.9			4.2.0	111.1		
" 5 (1822)	2.2	28.7			4.2.2	92.0		
" 6 (1823)	3.0.0	83.7			1.2.2	119.7		
" 7 (1824)	1.1.2	123.6			2.0	3.0		
" 8 (1825)	3.2	16.9			2.0	52.0	2.0	0
" 9 (1826)	1.1.0	73.8			2.2	15.2	2.2	70.2
" 10 (1827)	1.0.2	5.0			2.2	79.2	2.2	41.7
" 11 (1828)	3.0	117.9			2.2	78.5	2.2	12.5
" 12 (1829)					—		2.0	83.4
" 13 (1830)					1.3.2	27.2	1.0.2	75.0
天保2 (1831)					1.3.3	15.0	3.0.0	100.0
" 3 (1832)					1.2.2	98.3	3.0.2	97.9
" 4 (1833)					1.3.0	77.1	3.0.2	64.9
" 5 (1834)					1.1.2	75.1		
" 6 (1835)					1.3.0	15.2	2.1.0	28.5
" 7 (1836)					1.3.2	32.3	2.1.2	87.7
" 8 (1837)					2.0.2			
" 9 (1838)					△2.0.2	42.6	7.2.2	45.6
" 10 (1839)					△ 1.0	90.2	3.2.0	86.5
" 11 (1840)					2	45.7		
" 12 (1841)					△ 2	34.0	1.0.0	33.3
" 13 (1842)					1.1.2	110.6	1.0.2	13.1
" 14 (1843)					1.2.2	36.9	7.1.2	16.3
" 15 (1844)					—		4.2.2	48.7
弘化2 (1845)					—		7.3.0	

出典)「相統講金現量鏡」各年度(相統講文書)より作成。

注 永は厘以下切り捨て、(単位、文・分)。11月~翌10月までを一会計年度。その他の項目について、文政12年は
年は茱萸沢利米分受取、同14・同15年とも茱萸沢村利足金、弘化2年は茱萸沢村宗兵衛返金と土台加入金合計。

収 入

無尽落札		貸付金返済		作 徳 金		そ の 他		合 計	
両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
								11.2.2	
								27.0.2	68.3
								6.2.2	93.2
								5.3.2	33.4
								5.3.0	93.3
								5.2.0	95.2
								5.1.0	99.9
								5.3.2	97.3
								5.0.2	121.2
								5.3.0	4.0
								5.1.0	120.7
								4.3.0	78.4
								2.0.0	1.6
								1.3.2	68.9
								2.2.2	34.2
								2.2.0	0.9
						2	88.6	2.1.2	47.5
20.0.0						1.1.2	25.0	21.3.2	108.4
								2.0.0	102.2
								4.3.3	115.0
				1.0				4.3.2	71.2
								5.1.0	17.0
10.0.0		10.0.0						11.1.2	75.1
				1.0.0	81.0	3.3.2	65.1	17.3.2	108.8
				1.0		3.0	33.3	6.0.2	109.3
				1.2		2.2	7.1	3.0.0	7.1
				1.2				5.3.0	3.0
7.0.2	41.0			1.2	42.8			10.3.0	37.3
				1.2	42.8			1.4	88.5
15.0.0				1.2	42.8	1.0.2	61.0	17.1.2	103.1
		1.3.0		1.2	42.8			4.3.0	41.5
5.0.0				2.2		2.2		15.0.0	53.2
				3.2	73.1	2.2		6.0.2	121.8
				1.0	121.2	8.1.0	93.2	16.1.2	89.5

川島田甚七より利息、天保6年は天保5年夫食米被下につき冥加として差出、同7年も同じ、同8年も同じ、同12

遅滞差出し可申候。依而議定書如件
 文化九壬申年二月 竈和新田
 拾八軒連印
 発起世話人
 平兵衛事
 預り主 小林惣右衛門@

とあって、家の安泰を維持するために、草鞋8足か、銭48文宛を毎月集めるとのべている。何故こうした講が始められたのであろうか。「兼而相談之通(り)」とあるように、前もってそうした話し合いがもたれていたようである。実際、「文化九年 略日記」³⁹⁾の1月25日の項に「御囲米軒別八升ツツ仰付られ、夫ニ付其夜上新田中談合仕、月掛わらしノ事極り吉事」とあり、話し合いがもたれたことを示している。この時期、小田原藩では大久保忠真が藩主となって以後、藩財政の再建を基調としてさまざまな改革がおこなわれ、その一環として囲米や積立金の制度がなされたという⁴⁰⁾。囲米は、備荒貯蓄のために粃や米をたくわえておくものであるが、文化6年ごろに村内一軒につき米8升と麦2斗を囲い貯える「八升掛」という制度に移行し、竈新田でも文化・文政期にかけておこなわれるようになり、天保の飢饉に際して貸付米として運用されるようになったという⁴¹⁾。また積立金の制度についても享和3年(1803)に、一軒2文ずつの月掛をせよという奨励が藩から出されており⁴²⁾、その一環として相続講も成立したものと思われる。そこで、まず相続講がどのように運営されていたのか、その仕組みを明らかにしてみたい。

2. 相続講(文化9年～弘化2年)

まず、収入からみておきたい。表一8をみるとわかるように、文政11年までは、和新田18軒の掛銭と加入金、それに利子が大きな収入源となっている。掛銭は、議定書にある通り毎月48文を差し出したものであるが、必ず

しも48文でなく、一定していない。年により未納の者もあり、ばらつきがある。表をみてもわかるように1両2分前後である。加入金は、文化9年が川嶋田村の治左衛門で、文化10年が茱萸沢村の孫右衛門である。これは、表一9の支出の部をみてもわかるように、加入金に対する返済を10年間にわたってうけており、講の基金を拡大するための出資金のような役割をはたしている。この結果、例えば文化9年に10両を出資した治左衛門は文政5年までに合計16両2朱と永21文6分を受け取っており、かなりの配当をうけている。また、利子は、小林家が預り金として基金を運用し、年率15%の利息⁴³⁾をつけて返済しているものである。従って、表面的には和新田18軒の共有といいながらも、小林家の経営資金の一部として活用され、実質的には小林家が管理していた。文政8年から出てくる米売払代は、支出の部(表一9)のところでみるとわかるように田地購入によって得た作徳米をのちにみるように和新田中18軒に配分したあとの残りを販売した収入である。文政12年以降は、18軒による掛銭はなく、後は、無尽の落札金、小林家からの利息、それに小作地からあがる作徳米の販売収入が主な収入源となる。

次に、表一9の支出の方をみておこう。加入金返済は、先にのべたように治左衛門と孫右衛門に対する返済であり、年貢皆済は田地買入によって得た小作地に対する年貢である。

また、貸付金は、文政12年が川嶋田甚七に対してなされたものであり、以後のものは竈新田内に対するものである。ここで注目されるのは、田地買入代である。文政5年には萩蕪村の孫右衛門から16両3分で下田1反4畝

39) 正12。

40) なお、忠真の改革については、『市史』8巻、424～434頁を参照。また、『神奈川県史』通史編3近世(2)の741～768頁。

41) 筒井「前掲論文」69頁。

42) 『市史』8巻、427頁。

43) 利率は、文化12年から13%となり、文政6年からは10%となる。

表一 相 続 講 支 出

	加入金返済		無尽掛金		田地買入代		年貢皆済		米買入代		貸付金		その他		合 計	
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
文化																
9.2~9.10	1.0.0														1.0.0	
// 10(1813)	4.2.0														4.2.0	
// 11(1814)	7.3.2	24.9													7.3.2	24.9
// 12(1815)	5.2.0														5.2.0	
// 13(1816)	5.1.0														5.1.0	
// 14(1817)	5.1.0														5.1.0	
文政元	5.1.0														5.1.0	
(1818)	5.1.0														5.1.0	
// 2(1819)	5.0.2	120.2													5.0.2	120.2
// 3(1820)	5.0.0	86.5													5.0.0	86.5
// 4(1821)	4.3.2	64.9													4.3.2	64.9
// 5(1822)	5.1.2	83.5	2.0.0		16.3.0										24.0.2	83.5
// 6(1823)			1.3.0	75.6	15.0.0		1.2	46.4							17.0.2	122.0
// 7(1824)			1.2.2	28.6			1.0	116.4							2.0.0	20.0
// 8(1825)							1.2	122.1							1.2	122.1
// 9(1826)			1.2.0	63.4			1.2	52.0	3.0	0					2.2.2	115.4
// 10(1827)			1.1.0	94.3			1.0	115.3					2	7.0	1.2.2	84.6
// 11(1828)			1.0.0	45.7			1.0	111.7					95.0		1.2.0	2.4
// 12(1829)			1.2.2	17.2			1.2	38.3			10.0.0				11.3.2	55.5
// 13(1830)			3.3.2	25.0			2.0	99.2							4.1.2	124.2
天保2			3.2.0	12.1			2.2	107.1							4.0.2	119.2
(1831)			3.0.2	58.3			2.2	100.0							3.3.2	33.3
// 3(1832)			3.0.0				2.0.0	38.4							5.0.0	38.4
// 4(1833)			7.2.0	20.6			3.0	28.5	4.0.0						12.1.0	49.1
// 5(1834)			6.3.0	62.2			3.0				10.0.0				17.2.0	62.2
// 6(1835)			3.0.2	40.4			3.0	62.5							3.3.2	102.9
// 7(1836)			3.0.0				3.2	21.4			17.0.0				31.0.0	21.4
// 8(1837)			2.2.2	5.5			1.1.2	98.0							4.0.0	103.5
// 9(1838)			2.0.2	101.6			1.2.2	120.4					1.2.2	80.6	6.2.2	52.6
// 10(1839)			1.3.0				1.0.2	12.0					1.0.0		3.3.2	12.0
// 11(1840)							1.0.0	30.9							1.0.0	30.9
// 12(1841)							1.0.0	73.6							2.0.0	27.6
// 13(1842)			1.3.2	71.9									7.1		3.2.2	111.2
// 14(1843)			1.2.2	25.0			3.2	104.1					1.0.0	107.1	4.0.2	112.0
// 15(1844)			2.0.0	92.8			1.0.0	94.3					1.0.0	49.9	1.0.0	101.3
弘化2							1.0.0	101.3								
(1845)																

出典) 表一 8 と同じ。

注 文政9年と天保5年の米買入代は凶作につき作徳米不足による買入, その他の項目は, 文政10年と同11年は地神講, 天保8年は報徳土台加入金, 同10年は, 施餓鬼と地神講への支出, 同11年は物置代, 同14年は地神講・伊勢参宮銭別・庖廩業札の合計, 同15年は地神講・帳面買入代・伊勢参宮銭別・物置屋根代など。

15歩と下畑3畝14歩を購入し、文政6年には、中清水村の川右衛門から15両で下々田1畝15歩と下畑7畝9歩をそれぞれ購入し、その作徳米を文政7年から和新田18軒へ割米として配分していることである。それも、掛銭とは無関係に18軒平等に、大体2斗宛の配分をおこなっている。土地を購入して小作米を得るという方法は、おそらく平兵衛の地主的性格の反映であろう。それにしても、この相続講の運営の方法はきわめて興味深い。他村の講については未見であり、この相続講が平兵衛独自のものか、それとも小田原藩で一般にみられるものかどうかかわからないが、小林惟司氏は、大原幽学(1797~1858)の天保7年の子孫永々相続講に関して、『『相続講』は近世先進地帯の畿内周辺などではよく行われていたもので別段新しいものではない。しかし、幽学の相続講の仕法はこれらとは類を異にしている。』⁴⁴⁾と述べられ、幽学の相続講も彼が関西地方を巡歴していた時に見聞されたものであろうという。しかし、「一般に『相続講』といわれるものの仕法は、その仕法帳でみるかぎり通常頼母子講と同じとみてよい。しかし、幽学の『相続講』は闔取(くじとり)は行わず純粹の家相続のための共同準備財産をつくったところに特色がある。』⁴⁵⁾と述べられている。平兵衛の相続講は貸付機能⁴⁶⁾をもたないが、年々儉約をして掛銭を積み立て、平兵衛の管理とはいいいながら、共有財産をつくって払い戻しをうけるという方法は明らかに無尽や頼母子講とはちがっている。ここではこれ以上論じられないが、他との比較という点で興味深い問題である。ともあれ、幽学の相続講は門人の土地出資による「先祖株組合」の結成にむかい、平兵衛の相続講は、報徳仕法の導入後、その形をかえていく。

3. 報徳仕法

御殿場地方に報徳仕法が導入されることになったのは、天保8年(1837)2月の二宮尊

徳の廻村によってである。すでに天保4年ごろから天保の飢饉の影響があらわれており、天保7年には竈新田村でも一人6合の救い米が16軒57名に、また一軒につき1升から2升を14軒に支給したが、男16名・女7名の合計23名の死亡者を出したと言われている。翌天保8年4月には、難渋人の調査がおこなわれ、その結果、竈新田85軒中、「夫食差支無御座候」という無難の38軒を除いて、19軒の中難、28軒の極難の者に対して救急仕法がおこなわれた。それは、尊徳から困窮人病難之者当座御救金として1両2分、藩主忠真から御仁恵金として4両3分2朱と永39文4分、平兵衛ら12名の御仁恵加入金として3分2朱と永31文2分の合計7両1分2朱と永8文1分、それに加えて、困窮人への夫食米18俵1斗5升の費用として29両2朱と永41文9分を報徳役所から無利5カ年賦で借り入れるというものであった。だが、これは一時的な救急仕法であるので、この年の10月から本格的な仕法がおこなわれることになった⁴⁷⁾。ここでは、主に『二宮尊徳全集』の「竈新田・二子・日守諸村の仕法」⁴⁸⁾を利用して、その具体的な仕法をみておきたい。

一般に、報徳仕法が難村復興仕法としておこなわれる場合、次のようにしておこなわれる。まず、農民の生活実態を調査して「分度」——過去何年間かの収入を調べて分限を

44) 小林惟司『日本保険思想の生成と展開』(東洋経済新報社、1989年)206頁。

45) 同上、209頁。

46) 貸付金の項目はあるが、一件の例外、天保8年の1両3分を除いてすべて18軒外への利付貸付である。

47) この部分、『市史』8巻の453~458頁を参照した。同様の一時的な救急仕法は小田原藩全体でおこなわれている。また、長倉保「小田原藩における報徳仕法について」(北島正元編『幕藩制 国家解体過程の研究』吉川弘文館、1978年)も参照。

48) 『二宮尊徳全集』第19巻、584~866頁。佐々井信太郎編、龍溪書舎、1977年復刻版を利用。

表—10 報 徳 仕 法 収 入

(単位、両・分・朱・永)

	土台金差出	報徳加入金	酉年夫食 米返納金	無利貸付 返納金	利付貸付 返納金	そ の 他	合 計
天保8.10 ~9.6	100.0.0	17.0.0	5.3.120.8			1.1.038.5	124.0.1 59.3
天保10(1839)		8.0.052.7	5.3.120.8	17.1.1 106.3		10.1.225.0	41.2.2 79.8
〃 11(1840)		19.1.080.5	5.3.120.8	15.0.0 9.8		150.0.0	190.0.1 111.1
〃 12(1841)		18.2.245.7	5.3.120.8	48.0.3 93.3			72.3.0 34.8
〃 13(1842)		3.3.213.3	5.3.121.2	50.2.3 20.5			60.1.2 55.0
〃 14(1843)		12.2.242.6	5.3.120.8	53.2.3 24.5			72.0.2 87.9
弘化元(1844)		1.2.042.3		55.2.0 37.0			57.0.0 79.3
〃 2(1885)		4.2.017.4		60.2.2 112.0			65.1.0 4.4
〃 3(1846)		17.0.061.8		51.0.0 120.9			68.0.2 57.7
〃 4(1847)		23.8		19.1.3 96.7			19.1.3 120.5
嘉永元(1848)		2.0.037.5		22.2.0 68.2			24.2.0 105.7
〃 2(1849)		1.052.3		22.1.0 18.5 2.0.0			24.2.0 70.8
〃 3(1850)		3.0.031.3		20.0.2 75.8 2.0.0			25.0.2 107.1
〃 4(1851)		2.018.6		17.2.3 67.622.0.0			40.0.3 86.2
〃 5(1852)		1.2.024.1		22.0.1 103.113.0.0			36.2.3 2.2
〃 6(1853)		7.1.031.3		14.2.0 41.8 7.0.0			28.3.0 73.1
〃 7(1854)		3.031.3		16.2.2 124.0 7.0.276.3			24.2.2 106.6

出典)『二宮尊徳全集』19巻。620~751頁の「三才報徳現量鏡」(各年度)より作成。

注 7月~翌6月で一会計年度。

永は厘以下切り捨て(単位、文・分)。

その他の項目について。天保8年は、御仁恵金残金と初穂料の合計。

同10年は、無利当座返納分。同11年は、報徳金拝借。

定め、それに応じて生活をたてること——を定め、つづいて借金の多い者などに無利足貸付をおこない、さらに村民の入札によって票の多かった者に褒賞を与えることによって勤労意欲を高め、荒れ地の開発や土木工事をおこなうことによって生産の安定をはかる。さらに、分度を守ることによって生じる余剰を積み立てたり、他人に譲ることによって——これを「推譲」という——農民相互間の融資や凶作にそなえるというものである⁴⁹⁾。

竈新田村でも、ほぼ同様のやり方がとられた。そこで、まずその実施過程をみていこう。表—10の収入の方からみていくと、土台金⁵⁰⁾

は、平兵衛が茱萸沢村にもつ田畑2町5反7畝2歩の土地からあがる作得米50俵と金2両2分を差し出すことによって尊徳から借りうけた100両である。また、報徳加入金の17両は、和新田中(相統講)からと、平兵衛の心学仲間と、御殿場の日野屋からのものである。

49) 逆井「前掲論文」の79頁の報徳仕法の要約を参照。

50) 土台金とは、仕法をおこなうための基金となるものをいい、また、差出金とは報徳に帰依して文字通り差し出したものをいい、加入金は、金次郎への預け金であり返済を請求する権利が加入者の手に留保されている。長倉「前掲論文」519頁を参照。

表—11 報 德 仕 法 支 出

(単位 両・分・朱・永)

	拝借金返納		無利貸付金A		利付貸付金		加入金返済		耕作出精人 賞賛助成	
天 保8.10~9.6	5.3.1	20.8	103.0.0	105.8						
天 保10 (1839)	5.3.1	20.8	2.2.2							
" 11 (1840)	5.3.1	20.8	163.3.0	105.0					8.3.0	41.6
" 12 (1841)	35.3.1	20.8	16.3.0				7.0.0		5.0.0	98.0
" 13 (1842)	35.3.1	21.2	15.0.2							
" 14 (1843)	35.3.1	20.8	40.1.2	48.6					5.0.0	
弘 化 元 (1844)	30.0.0		6.0.0						5.1.2	50.5
" 2 (1845)	30.0.0		27.2.0	71.1						
" 3 (1846)	30.0.0		19.2.2				8.2.0	28.0		
" 4 (1847)			8.2.0							
嘉 永 元 (1848)			15.2.0		20.0.0		4.2.2	27.7		
" 2 (1849)			20.2.0							
" 3 (1850)							10.3.0	54.6		
" 4 (1851)			17.1.2		30.0.0					
" 5 (1852)			3.2.0				3.0			
" 6 (1853)			33.3.0		2.0.0					
" 7 (1854)			5.0.0		25.0.0					
	助 成 金		そ の 他		合 計		残金(土台金)B		B/A	
天 保9.10~9.6			10.1.2	25.0	119.1.1	26.6	4.3.0	32.7	4%	
" 10 (1839)	37.0.3	21.5			45.2.2	42.3	3.0	80.2	28	
" 11 (1840)	4.0.0	103.1	6.2.2	10.3	189.0.3	30.8	2.0.0	35.5	1	
" 12 (1841)	3.2.2	42.3	3.2	116.1	69.1.1	27.2	5.0.2	105.6	30	
" 13 (1842)	1.3.0	24.0			52.2.3	45.2	13.0.0	107.4	86	
" 14 (1843)	1.1.0	37.0	1.2.0	100.0	83.3.1	81.4	1.0.2	51.4	3	
弘 化 元 (1844)	6.2.0	6.7			47.3.2	57.2	10.3.0	73.5	179	
" 2 (1845)					57.2.0	71.1	18.2.0	6.8	67	
" 3 (1846)	2.0.0				60.0.2	28.0	26.2.0	36.5	135	
" 4 (1847)					8.2.0		37.2.0	94.5	441	
嘉 永 元 (1848)					40.0.2	27.2	22.1.0	47.5	144	
" 2 (1849)	1.0	46.2		69.2	20.3.0	115.4	26.0.0	2.9	127	
" 3 (1850)	2.0				11.1.0	54.6	39.3.2	55.4	—	
" 4 (1851)	3.1.2	25.0			50.3.0	25.0	29.1.2	54.1	169	
" 5 (1852)				47.6	4.1.0	47.6	61.3.0	71.2	1764	
" 6 (1853)	6.1.0	12.5			42.0.0	12.5	48.2.2	6.8	144	
" 7 (1854)	1.0.0				31.0.0		41.3.0	113.4	835	

出典) 表—10と同じ。 注 その他の項目は、天保9年は夫食当座貸付の費用。天保11年, 同12年, 同14年はともに荒地起返し諸費用。

表-12 和新田中借財一覧（天保9年3月）

（単位・両・分・朱・永）

	天保8年夫 食借用高		借 用 金		合 計		無利貸付金 （天保8）		
1. 市 郎 右 エ 門	2.0.2	1.8	2.2.2		4.3.0	1.8	4.3.0	1.8	6年賦
2. 平 吉 後 家	3.1	45.5	2.1	49.2	1.1.1	94.7	1.1.3	32.5	//
3. 儀 左 エ 門	4.3.0	70.7	4.0.2	36.5	8.3.3	44.7	8.3.3	44.7	//
4. 五 郎 右 エ 門	1.2.0	11.2	2.2.0	60.3	4.0.1	9.0	4.0.1	9.0	//
5. 惣 兵 衛	1.1	44.7	2.3.0		3.0.1	44.7	3.0.1	44.7	//
6. 与 兵 衛	1.0.1	39.1	5.2.2	50.1	6.3.0	26.7	6.3.0	26.8	//
7. 七 兵 衛	2.2.0	23.4	2.0.2	79.9	4.2.3	40.8	4.2.3	40.8	//
8. 市 左 エ 門	3.1	2.2	3.0.0	22.1	3.3.1	24.3	3.2.1	24.4	//
9. 治 兵 衛			1.3.1	35.8	1.3.1	35.8	1.0.3	35.8	//
10. 熊 次 郎			1.3	53.6	1.3	53.6	1.3	53.7	//
11. 武 兵 衛	2.2.0	97.9	1.2.3	0.4	4.1.0	35.8	4.1.0	35.9	//
12. 善 右 エ 門			2.2.0		2.2.0		1.1.0		//
13. 松 右 エ 門	1.1.0	45.6	3.1.3	77.3	4.3.0	60.4	4.2.3	60.5	7年賦
14. 政 兵 衛	2.3.0	36.3	1.0.0		3.0.3	36.3	3.0.3	36.6	8年賦
15. 太 右 エ 門	3.0.0	46.0	3.0.3	27.7	6.1.0	11.2	6.1.0	11.3	//
16. 伊 助	3.3.0	5.5	12.1.1	46.8	16.0.1	52.3	16.0.1	52.4	11年賦
合 計	27.0.0	32.4	50.0.3	39.7	76.2.2	72.1	75.0.1	10.9	

出典）「借財取調帳」（補187）より作成。

注 永は厘以下切り捨て（単位、文・分）。12番善右エ門は1両1分用捨。

表-13 貸 付 人 一 覧

貸 付 人	金 額	
	両・分・朱	永
清五郎（名主）	8.3.3	
平兵衛	8.0.1	47.4
久左エ門（組頭）	3.3.2	
与五兵衛（百姓代）	1.2.2	
村内（上記4名を除く）	5.0.2	
村 外	7.2.2	56.7
薬 礼	5.0.0	
そ の 他	9.3.2	24.1
合 計	50.1.0	3.2

出典）表-12と同じ。

注 永は厘以下切り捨て（単位、文・分）。

また、酉年夫食米返納は天保8年に夫食米として貸し与えられた代金29両余の返済のために徴収されたものである。天保11年のその他の項目に分類した150両は、竈新田全体に仕法が拡大された時に、土台金不足として報徳役所から借り入れたものである。天保10年以後の報徳加入金は、村民が縄索や草鞋作り、諸事俟約などして支出したものであるが、その内訳は煩雑になるので省略した。

次に、表-11の支出の方を見ると、まず拝借金返納金は尊徳からの借用金の返済で、5両3分1朱余は夫食米の代金であり、天保12年からの30両は土台金不足として借り入れた150両のそれであり、それぞれ5年賦で返済されている。無利貸付金は後にみる。耕作出精人賞助成は、村民の入札によって上位の者に褒賞として与えられたもので、当村では上位5位の者に5俵～2斗の米が与えられた。次に、助成金は、「農具不足之者」や「夫食差支之者」などに与えられている。最後に、無利貸付金をみておきたい。天保8～9年の103両余は、主に和新田18軒の借金の返済にあてられたものである。そこで、だれがどれだけの借金をしているかを示したのが表-12である。これをみると全体で16軒あがっているが、平兵衛（惣右衛門）と無借の嘉助が除かれている。この表でみる限り、大部分の者が借金をかかえているが、天保8年に支給された夫食米や大麦の費用が合計で27両ほどあって、あとは全体で50両ほどあり、個々の借用金額は、16番の伊助をのぞくと2両から5両の間におさまる。この金額は町場であった御殿場村や相州の村々に比較してさほど多いとは思えない⁵¹⁾。表-13は、それを誰から借りているのかを示したものである。これをみると、名主の清五郎が約9両でもっとも多く、次に平兵衛の8両、組頭の久左衛門と百姓代の与五兵衛があわせて5両ほどということになる。この4名からの借用は、時期が大体12月に集中しており、年貢納入後の生計費の不

足とかかわりがあるかもしれない⁵²⁾。また、薬礼が5両あり、その他の項に分類したものにも「父病中死去入用」や「両親病中死去仕舞金入用」などとかかれたものもあり、当地方で流行した痘瘡などの疫病の影響によるものと思われるものもある。平兵衛が「御趣法土台金差出之事」でのべている「当村字上新田坪、家数拾八軒御座候処、近年不仕合打続き、連々困窮罷成、其上去ル已申兩度之大凶作飢饉に付、金銭貸借ハ勿論、雜穀売買無之程之年柄、既ニ可及飢渴之處（中略）引続時疫流行仕、看病は勿論、差当り今日之営にも差支、術計尽果、当惑罷在、第一田植草取手後」⁵³⁾れという記述もあながちオーバーとはいえないだろう。

さて、この借用金を無利貸付金で整理していくことになるのであるが、ここで簡単に報徳仕法の無利貸付の制度を説明しておく、例えば、5両を当時の一般的な利率である1割5分から2割で借用したとすれば、翌年には元利金あわせて5両3分～6両を返済しなくてはならない。一度にこれだけの借金を返済するのは困難で、利子分だけを返済したとしても元金の5両は残ることになり、結局は潰百姓となっていく例がみられる。それに対して、無利貸付の場合、5両を5年賦で返済したとすれば、毎年1両ずつを5年間で返済し、その翌年冥加として1両を返済し、6年間で合計6両を返済することになる。これ自体をみれば、利率は2割となって高利とかわらないようにも思えるが、実際には、毎年の返済分は元金と利子分を含んでおり、年度ごとの利率はもっと低くなる⁵⁴⁾。さらに、返済

51) 内田哲夫「報徳仕法と御殿場村」(『御殿場市史研究』4号, 1978年), 大江よしみ「天保期小田原藩領の農村の動向」(『小田原地方史研究』1号, 1969年)を参照。

52) 『市史』8巻, 378頁に、時期を大分さかのぼるが、安永年間にも、破産や欠落が、年貢を納めた11月か12月にみられる光景だったとある。

53) 『二宮尊徳全集』19巻, 620頁。

表一14 小林家小作人一覧（天保12年，正月）

人 名	田 方	畑 方	
		俵・斗・升	両・分・朱 銭・文
1. 市郎右エ門	9.1.0		1548
3. 佐吉（儀左エ門倅）	5.3.0		
4. 五郎右エ門	5.0.0		
5. 宗 兵 衛	1.3.0		
6. 与 兵 衛			1200
7. 七 兵 衛	7.0.0		
8. 市 左エ門	5.3.5		500
9. 治 兵 衛			700
11. 武 兵 衛	8.0.0	2	1300
13. 松 右エ門	2.0.0	1	100
14. 政 兵 衛	1.0.5		
15. 太 右エ門	2.1.0		
16. 伊 助	9.1.3	2	500
小 計	57.1.3	1.0.1	748
儀右エ門（宿）	3.2.5		
儀兵衛（払）	4.3.0	2	200
伊 八（〃）	6.0.5		1200
惣左エ門（〃）	5.2.0	2	200
武右エ門	4.0.0		
安右エ門	1.2.0		
九兵衛（宿）	4.2.0		
伝左エ門（〃）	4.0.0		
五右エ門			200
茂右エ門		1.2	
元兵衛			700
忠右エ門		2.2	
用 助			300
河右エ門			300
源蔵（中清水）		2.0.0	100
勝右エ門		2	200
不 明		1.0.0	
小 計	34.0.0	4.3.2	
合 計	91.1.3	5.3.3	748

出典）「家政取調帳」（補203）より作成。

注 他に惣右衛門（小林家）手作，9俵3斗と1両1分2朱。

銭は1両＝6貫800文で計算。

割作の場合は均等に割った。

宿は宿地区，払は払堰。

表一15 報徳仕法無利貸付金・

人 名		天保8.10 ~天9.6	同 10	同 11	同 12	同 13	同 14
1. 市郎右エ門	借用 返済	4.3.0 1.8	3.0 1.8	3.0 50.0	1.1.1 同 左	1.0.1 6.2	同 左
2. 平吉後家	借 返	1.1.3 32.5	1	1.0 31.5	同 左	〃	〃
3. 儀左エ門	借 返	8.3.3 44.7	1.1.1 59.2	1.0.2 1.2.0 22.1	3 1.3.0 15.8	3.0.0 同 左	2.1.1 53.3
4. 五郎右エ門	借 返	4.0.1 9.0	1.0.1 9.0	2.1 37.5	同 左	〃	〃
5. 宗兵衛	借 返	3.0.1 44.7	3 44.7	2.0 75.0	同 左	〃	〃
6. 与兵衛	借 返	6.3.0 26.8	1.0.2 26.8	3.0.0 1.0.2	1.2 1.2.3 37.5	1.3.0 12.5	同 左
7. 七兵衛	借 返	4.2.3 40.8	3.3 40.8	3.0	同 左	〃	〃
8. 市左エ門	借 返	3.2.1 24.4	3.0 24.4	1.3.0 2.1 50.0	2.3.2 3.3 25.0	1.1.0	3.0.0 同 左
9. 治兵衛	借 返	1.0.3 35.8	1.0 35.8	1.0 50.0	2.0 同 左	1.1 37.5	同 左
10. 熊治郎	借 返	1.3 53.7	3 42.2	52.3	同 左	〃	〃
11. 武兵衛	借 返	4.1.0 35.9	2.0 35.9	3.0	同 左	〃	〃
12. 善右工門	借 返	1.0.0	1.0	3 12.5	同 左	〃	〃
13. 松右エ門	借 返	4.2.3 60.5	1.0 1.6	2.3 61.9	同 左	2.3.0 〃	1.1.2 1.1.0 49.4
14. 政兵衛	借 返	3.0.3 36.6		1.1 19.2	1.2 38.2	同 左	〃
15. 太右エ門	借 返	6.1.0 11.3	2.1 11.3	2.0 3.1	2.1.2 3.2 37.5	1.1.1 75.0	同 左
16. 伊 助	借 返	16.0.1 52.4	1.3 52.4	1.2.1	同 左	〃	〃
17. 嘉 助	借 返		2.2.2	2.0 25.0	1.3 同 左	2.2.0 2.1 6.2	1.0.1 6.2

出典) 表一10と同じ。

注 嘉永3年以後、返済額は同額に付省略。ただし、4番五郎右衛門のみ嘉永4年に6両を借用し、同5年以後、

期間はかならずしも5年とは限らず、後にみるように6年から10年におよぶ場合もあり、当時の高利貸付に比較して低利であったことにはちがいない。しかし、ここで大事なことは、分度の設定ということである。返済は分

54) 大塚英二氏は、払い込分のうち、利済分と元金済分を分けて考えて利率を計算し、毎年の利子を5分5厘として払い込んでいけば、ほぼ6年で完納し終わる勘定となると計算されている。「近世後期北関東における小農再建と報徳金融の特質」(『日本史研究』263号)45~46頁を参照。

借用と返済

(単位, 両・分・朱・永)

弘化元		同 2		同 3		同 4		嘉永元	同 2		～安政(注)
〃		〃		1.0	18.7	同 左		31.2	同 左		
〃		〃									
同 左		同 左		1.0.2	93.7	2.1	56.2	同 左		18.7	
〃		〃									
〃		〃									
〃		〃		2.2	12.5		37.5	同 左			
〃		〃									
1.3.1	37.5	同 左		2.2	12.5	1.0	37.5	37.5	同 左		
〃		〃			50.0	同 左	〃		〃		
〃		〃									
〃		〃									
〃		〃									
1.2.1	11.9	同 左		〃		3.0	75.0	同 左	〃		
〃		〃		〃		〃					
〃		〃		〃		1.1.0	37.5				
〃		〃		〃		〃		〃	〃		
同 左		〃		2.0	43.7	同 左		〃		43.7	

1両2朱と永75文を返済。

度にもとづいておこなわれるわけであるが、分度は農民にだけ求められるわけではなく、年貢収奪者である領主にも求められるものであり、必要労働部分に食いこむような年貢では、結局農民の衰退をまねくことになり、報徳仕

法では、この分度設定が重要なものとなってくる。

それでは、当村ではどのような方法でおこなわれたのであろうか。もう一度、表一12をみると、借入金に対してほぼ同額の無利貸付

がおこなわれており、期間も6年から11年にわたっていることがわかる。これが主に和新田を中心におこなわれたのに対し、2年後の天保11年には、それ以外の地区にも無利貸付がおこなわれ、竈新田全体に対する報徳仕法が実施されるようになる。こうした2年のずれが生じたのは次のような理由によるものと考えられる。

表一14は、天保12年段階における小林家と和新田の農民との関係を示したものであるが、この表をみるとわかるように、小林家を除いた17軒中13軒が小林家の小作人となっており、竈新田全体で得られる小作米91俵1斗あまりのうち、57俵1斗が和新田から獲得されるということ、また、先にみたように相続講という形で小林家と和新田住民とのつながりが強かったということ、さらに、天保9年の土台金100両は平兵衛が茱萸沢村からあがる作徳米を差し出す形で尊徳から借用したものであったことなどが、その理由として考えられるだろう。そして、このことは、茱萸沢村の作徳米が入らなくなった以上、小林家は和新田住民の生活の安定をはかり、一層結びつきを強めていくことになるだろう。

では、報徳仕法導入後、村の復興ははたしてできたのだろうか。その後の無利貸付を追いながら、それをみてみたい。表一15は、人名が継続してわかる和新田の住民しかあげていないが、借り入れが天保9年の一回限りで終わるのではなく、継続しておこなわれていることがわかる。報徳仕法は本来の目的として、難村の建てなおしを目的とし、そのためには村の構成員たる個々の農民の生活維持をはかることにあった。そのために、まず第一に、年貢収奪の緩和をはかるために領主に対して分度の設定が要求されるが、それがなされなかったこと。第二に、無利貸付は、いかに低利とは言っても、これを返済するための現金収入の途が竈新田にはとぼしいこと。第三に、久左衛門と平兵衛は、それぞれ、天保

14年に仕法金のうちから不定年賦貸付金を借りることによって、18両2分2朱で字餅山の開発と、10両2朱で字西の沢の開発をおこない、さらに弘化2年にも平兵衛・久左衛門は、13両余を借りて荒地開発をおこない、人足賃として一日一人200文を支払うという形で現金収入の途をはかっているが、やはりこれだけでは農民の生活維持をはかるのは困難だったにちがいない。それを具体的に示す史料はないのであるが、表一16はそれをいくらか示しているかもしれない。この表は、和新田のみしか示しえないが、おそらく個々の家の分度設定のために穀物の収穫を調べたものであろう。史料の欠落もあって全部示しえないが、この表と表一15の天保11年の返済額とを比較してみると、例えば、3番の儀左衛門は天保10年の所持穀物の価格が5両3朱で返済額が1両2分におよび約29%を返済にあてなくてはならず、同様に6番の与兵衛も所持穀物が4両1分で返済額が1両2朱で26%となり、8番の市左衛門も所持穀物が4両で返済額が2分2朱で15%、13番の松右衛門は所持穀物が3両1分で返済額が約3分で23%、15番の太右衛門は所持穀物が2両1分で返済額が3分1朱で36%におよび、その後、天保11年以後も何回か無利貸付金を借り入れることになる。他方、14番の政兵衛は所持穀物が3分で返済額が1分2朱で50%、16番の伊助は所持穀物が5両2分1朱で返済額が1両2分1朱で28%となるにもかかわらず、以後借り入れはおこなっていない。しかしながら、潰の2軒をのぞいて、15軒中8軒が天保11年以後、何回か借り入れをくりかえしているということは、やはり一度の借り入れで経営を維持することは困難ではなかったかと思われる⁵⁵⁾。

55) 長倉氏のやられた曾比村では、返済金と小作米の返済の比重が大きく、これを差し出し田地の作取りによって自小作農の再建をはかろうとしたとされている。竈新田村では、そうした田地を差し出して作取りをさせるといことはおこなわれず、それがこうした無利貸付金の借用

表一16(1) 和新田中取穀取調一覧

(単位・俵・斗・升)

		米	唐黍	稗	蕎麦	粟	小豆	大豆	赤黍	合計	() は所持穀物価格
1. 市郎右エ門	天保10	22.2.0	4.2.0	7.2.5	1.2.0	2.2.0	0.2.0	2.2.0	0.3.5		
	残 而	11.2.5	4.0.0	6.0.0	1.2.0	2.0.0	0.2.0		0.3.5	26.2.0	他に芋60俵(7両1分1朱)
	弘化元	10.0.0	1.0.0	12.0.0	2.0.0	7.0.0	0.1.0			32.1.0	他に小麦2俵・裸麦1俵 (8両3分2朱) 借用金
	// 2	10.0.0	2.0.0	12.0.0	1.0.0	8.0.0	0.0.6			30.0.6	2両2分 他に麦6俵
2. 平吉後家	潰										
3. 儀左エ門	天保10	15.1.6	3.1.0	5.0.0	2.0.0	3.1.5	1.1.0	1.0.0			
	残 而	5.1.0	3.0.0	3.3.5	2.0.0	2.0.0	0.3.5	1.0.0		18.0.0	他に芋30俵(5両3朱)
	弘化元	0.3.5	3.0.0	7.0.0	1.0.0	3.3.0	0.0.5			15.3.0	他に小麦2斗・裸麦2斗 (2両3分2朱) 借用金
	// 2	4.2.0	2.2.0	10.0.0	1.0.0	3.0.0				21.0.0	3両
4. 五郎右エ門	天保10	14.3.2	3.3.0 (ママ)	3.3.0	2.5.0	3.1.0	0.3.5	0.2.6			
	残 而	7.3.4	4.1.0	3.3.0	2.0.0	3.0.0	0.3.0			21.2.4	他に芋28俵(5両3分3朱)
	弘化元	4.0.0	2.0.0	8.0.0	0.3.0	3.0.0	0.1.0			18.0.0	(4両) 借用金4両1分
	// 2	4.0.0	3.0.0	9.0.0	1.0.0	1.2.0	1.0.0			19.2.0	
5. 宗兵衛	天保10	7.1.0	2.1.0	1.1.0	1.1.0	1.0.0	0.1.5	0.2.3	1.0.0		
	残 而	4.1.0	2.0.0	1.0.0	1.0.0	0.3.5	0.1.5	0.2.3	0.3.0	10.3.3	他に芋18俵(3両2朱)
	弘化元			1.0.0	0.3.0	3.0.0				4.3.0	(3分2朱)借用金3両3分
	// 2	1.2.0	1.1.0	1.0.0	1.0.0	1.0.0	0.1.0			5.2.0	
6. 与兵衛	天保10	16.1.0	5.3.0	6.0.0	1.2.5	2.2.0	1.0.0	1.1.0	0.1.5		
	残 而	3.2.5	5.0.0	5.0.0	1.1.0	2.0.0	1.0	2.0	0.1.5	18.0.0	他に芋27俵(4両1分)
	弘化元	2.2.0	1.0.0	3.0.0	1.2.0	0.6.0	1.0			9.3.0	他に朝鮮稗1俵・大麦1 俵(2両□分2朱)
	// 2	4.0.0	2.2.0	3.0.0	2.2.0	3.0.0				15.0.0	借用金1両2分3朱 他に朝鮮稗1俵, 小麦1 俵2斗5升
7. 七兵衛	天保10	9.2.0	2.2.0	5.1.4	1.0.5	2.3.4	0.3.0	1.3.0			
	残 而	4.2.0	2.0.0	5.0.0	1.0.0	2.0.0	0.2.5	0.3.0		15.3.5	他に芋25朱(4両3朱)
	弘化元	2.2.0	2.0.0	8.0.0	2.0.0	4.3.0		0.2.0	0.3.0	20.2.0	他に小麦2斗, 裸麦2斗, うるち米2斗5升(4両 2分)
	弘化2	不 明									
8. 市左エ門	天保10	14.3.6	3.0.0	2.3.0	2.3.2	1.1.1	0.1.2	1.2.8			
	残 而	6.0.4	2.1.5	2.3.0	2.0.0	3.3	0.0.8			14.1.0	他に芋16俵(4両)
	弘化元	4.0.0	2.0.0	2.0.0	1.0.0	2.2.0	0.3.0			12.1.0	他に小麦1俵・大麦1俵 (3両2分3朱)
	// 2	6.2.0	2.0.0	4.2.0	2.0.0	2.0.0	0.2.0			17.2.0	他に麦1俵

年貢・小作米・秋夫食・味噌など引(以下2番~17番まで同文につき省略)

表-16(2)

		米	唐黍	稗	蕎麦	粟	小豆	大豆	赤黍	合計	
9. 治兵衛	天保10	7.0.0	2.2.0	1.2.0	1.0.7	2.1.7		0.1.5			
	残而	2.1.5	2.0.0	1.0.0	0.2.7	2.0.0				8.0.2	他に芋15俵(2両1分)
	弘化元	4.0.0	0.3.5	2.3.0	0.1.5	5.2.0				13.2.0	(3両1分) 借入金1両
	// 2	不明									
10. 熊次郎	天保10		0.3.0		0.1.0		0.0.3			1.0.3	(1分)
	弘化元・	同2年共不明									
11. 武兵衛	天保10	20.3.0	3.2.0	5.0.0	1.0.0	4.3.0	1.1.0	4.2.0	2.0.0		
	残而	10.3.0	3.0.0	5.0.0	1.0.0	4.3.0	1.0.0	4.2.0	1.3.0	31.3.0	他に芋65俵(8両3分3朱)
	弘化元・	同2年共不明									
	弘化2	不明									
12. 善右衛門	潰										
13. 松右衛門 (倅源次郎)	天保10	7.1.0	4.0.0	1.2.0	1.0.0	3.0.0	1.0.0	0.2.0			
	残而	2.2.5	4.0.0	1.2.0	1.0.0	2.0.0	0.2.5	0.2.0		12.1.0	他に芋8俵(3両1分)
	弘化元	0.1.0	1.0.0	4.2.0	0.1.5	5.1.5				11.2.0	他に小麦1俵(2両2朱) 借入金3両1分
	弘化2	不明									
14. 政兵衛	天保10	2.0.5	1.2.2	0.1.5	1.0.0	0.2.8	0.0.5	0.0.6			
	残而	0.1.6	1.0.2	0.1.5	0.3.2	0.2.8	0.0.3			3.1.6	他に芋9俵(3分)
	弘化元・	同2年共不明									
15. 太右衛門	天保10	6.1.5	2.3.0	1.2.5	1.0.5	1.0.0		0.3.0			他にこま1斗朝鮮稗1斗 5升
	残而	2.3.2	2.0.0	1.0.0	1.0.5	1.0.0		0.1.5		8.1.2	他に芋12俵(2両1分)
	弘化元	2.2.0	0.3.0	2.2.0	1.0.0	2.2.0				9.1.0	他に小麦2斗, 裸麦1斗 5升(2両) 借入金1両 2朱
	// 2	3.0.0	1.0.0	3.2.0	1.1.0	1.2.0				10.1.0	
16. 伊助	天保10	21.2.0	5.1.0	6.0.0	2.0.0	2.1.0	1.0.5	2.2.0	0.2.2		
	残而	6.0.0	4.2.0	5.0.0	1.2.0	2.0.0	0.3.5	0.3.0	0.1.6	21.0.1	他に芋25俵 (5両2分1朱)
	弘化元	不明									
	弘化2	5.2.0	2.0.0	6.0.0	1.3.0	3.0.0		0.1.5		18.2.5	
17. 嘉助	天保10	18.0.0	3.0.5	3.0.0	1.3.0	3.0.0	0.1.0	1.1.5			
	残而	10.0.6	2.1.5	2.0.0	1.2.5	2.1.6	0.0.5	0.3.5		19.2.2	他に芋18俵(6両1分)
	弘化元・	同2年共不明									

出典) 天保10年(推定)「亥秋取穀惣調帳」(正109), 弘化元年正月, 弘化2年正月は相統講文書より, それぞれ作成。

注 穀物価格に芋の分は入っていない。価格は史料では銀表示であるが, 1両=60匁としてなおした。合以下は切り捨てた。

しかし、この仕法も、村の復興、ひいては村の構成員である農民の生活安定を目的としながらも、それを十分に達成することなく、弘化3年(1846)には中止となる。それについて、小田藩役人は次のように申し渡している。「去ル未(弘化4年)十二月廿七日、地方御役所において被 仰渡候趣、駿・豆・相村々惣代の者江報徳主法の儀、良法ニ相違無之段は、一統も承知の通り有之候得共、身分之行容易ニ不相務、此末何様之過失可生哉も難計処より昨午(弘化3年)七月十六日御量ニ相成、加之金次郎殿(幕府に――筆者注)召抱ニ相成、其上自他之貸附勘定合モ入組候間、今般御□替金を以、御同人銘目之分は不残御返金ニ相成候。』⁵⁶⁾とのべており、結局は、尊徳と農民との接触をきらった小田原藩によって廃止されてしまうのである⁵⁷⁾。しかしながら、それにつづいて、「尤一村限り主法之儀、素勤農□□ニ付手戻無之、出情可取行、依而ハ出情次第無利足貸附等可取計段は委細昨午(弘化3年)ノ七月十六日御代官々被申聞置候通ニ候。』⁵⁸⁾とあり、虫くいがあるが、報徳仕法が中止されても、一村限りの仕法は勤農の手段であり、中止することなく継続するように申し渡したように思われる⁵⁹⁾。それをうけて、竈新田では、「当村之義も去未(弘化4年)十二月廿九日夜、於村方御役方ニ世話人立合之上、是迄取行来り候報徳仕法之義は量ニ相成候ニ付而者、村方加入金之分当申(嘉永元年)正月七日夫々江割返シ申候処、厚く御趣意を奉感服候者共は、御主法以来相助り候為冥加、以余業或ハ繩索沓草□或ハ作初穂、日掛等を以差出し候加入金之義ニ候得ば、往々窮民無育難済人取立主法金之内へ御加入被成置候様願出候分は置据、報徳元恕金ニ相改、土台金江組入申候。』⁶⁰⁾とあり、仕法継続を求める村民たちによって維持されていく。実際、表一10・11にみられるように仕法は嘉永7年まで続けられている。しかし、表一11にみられるように、耕作出精人入札や荒地開発など

の事業はおこなわれず、また、報徳役所からの拝借金に対する返済も弘化3年で終了し、以後残金(＝土台金)はしだいに増大していく。それに対して、無利貸付金は土台金に比べて相対的に減少傾向にある。これをもって、一応の危機を脱したことによって、もはや借り入れを必要としなくなったとも考えられるが、次にみるように相続講の場合には、毎年恒常的に無利貸付をくりかえしており、和新田以外の竈新田の農民たちが借り入れを必要としなくなったとは考えられず、報徳仕法自体がしだいに終息に向かいつつあったのではないかと考えられる⁶¹⁾。

4. 相続講(弘化3年～文久元年)

ここでは、弘化3年(1846)以後の相続講

のくりかえしということをまねき、また、相続講が金融機関としての役割に転化していく原因となるのかもしれない。

56) 「木二居士筆筆跡」補269。

57) 小田原藩領内には「報徳様」への帰依の動きがあったという(長倉「前掲論文」)。また、藩役人の間では尊徳の教えをキリシタンの様におそれていたという(内田哲夫『江戸時代の小田原』小田原市立図書館、1980年)219頁。小林家に残る「村々惣代江」(補300)という史料には、「報徳仕法之儀、量ニ相成候儀ハ、去夏申聞置候ニ有之候。猶今般肝煎并世話人共儀も差免候事ニ而、以来金治郎殿方江役人共始小前末々迄罷越候儀ハ勿論、村方々紙面差出候儀、決而不相成、万一御同人々村方へ宛紙面等差越候とも、兼而申聞置候通、封之儘御役所江差出し様可致候。右之趣、心得違無之様、吃度申聞置候。右掛り以申渡」とあり、かなり厳しいものであったと思われる。なお、この中止については長倉「前掲論文」がくわしい。

58) 補269。

59) 実際、この1ト月前の6月には、「報徳仕法之義は貫き置、一村限り古来之趣法ニ御戻し被遊度、難村取直し之義は村々存ばかり次第、御掛り様ニ而無利足金御貸附も被下置候段、厚ク御利解被 仰聞、難有奉畏候」(『市史』1巻、805頁)とある。また、長倉「前掲論文」参照。

60) 補269。

61) 竈新田村の報徳仕法がいつ終わったかは不明である。『二宮尊徳全集』19巻には、嘉永7年

表-17 相 続 講 収 入

	利 子		米売払代		無尽落札		田地代返金		作 徳 金	
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
弘化 3 (1846)	—		—							
〃 4 (1847)		85.7	6.1.0				14.0.0		1.1.0	86.4
嘉永元(1848)			3.2.0						2.0	15.1
〃 2 (1849)			4.2.0	62.5					2.0	83.0
〃 3 (1850)			6.2.2	45.2					3.2	105.5
〃 4 (1851)	2	7.0	3.2.0	47.8			15.0.0		2.0	53.3
〃 5 (1852)	2.2	99.0	1.0.0	110.4			3.3.0		1.0.0	77.9
〃 6 (1853)	2.2	38.6	4.1.0	121.0					1.1.0	115.3
安政元(1854)	3.2	66.5	15.2.0	20.3					1.3.2	119.1
〃 2 (1855)	1.1.0	67.1	12.0.0	82.1			4.0.2	75.0	1.3.2	13.6
〃 3 (1856)	1.1.0	68.9	1.3.0	29.6					1.3.2	40.5
〃 4 (1857)	1.2	22.4			25.0.0		30.0.0		1.0.0	51.7
〃 5 (1858)	△2.2.0	119.7							2.2	106.3
〃 6 (1859)	△2.1.2	90.3	11.2.3	87.3					3.0	30.1
万延元(1860)	△3.3.0	33.6	3.3.1	37.8					1.2.3	56.8
文久元(1861)	△4.1.0	120.3	4.0.3	12.8			141.1.1	31.7	1.2.0	91.3
	利付貸付返納金		無利貸付返納金		そ の 他		合 計			
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
弘化 3 (1846)					3.2.0				3.2.0	
〃 4 (1847)			6.3.2	11.0					28.2.0	58.1
嘉永元(1848)	3.3.2	25.0	6.0.2	82.4					14.0.0	122.5
〃 2 (1849)	8.2.2	95.0	8.1.0	57.4	2.2	102.6			23.3.2	25.5
〃 3 (1850)	2.3.2	65.0	12.0.2	79.7	6.0.0				29.3.0	45.4
〃 4 (1851)	3.3.0	10.0	14.1.0	54.7	3.0	78.1			35.0.2	0.9
〃 5 (1852)	3.2.0	80.0	22.1.2	111.7	8.0.0				40.2.2	104.0
〃 6 (1853)	3.1.2	25.0	17.3.2	58.6	2.2	39.6			28.1.2	23.1
安政元(1854)	18.1.2	53.3	19.3.3	33.3					56.3.1	42.5
〃 2 (1855)	4.2.0	100.0	17.1.2	91.5		30.8			41.2.0	85.1
〃 3 (1856)	4.0.2	103.0	15.1.0	76.6	3.0.2	70.6			27.3.0	14.2
〃 4 (1857)	3.3.0	106.0	17.1.2	101.6					77.3.0	31.7
〃 5 (1858)			17.1.2	93.5	7.1.2				22.3.2	80.1
〃 6 (1859)			22.2.0	118.5					32.2.3	20.6
万延元(1860)			14.0.0	40.0					15.3.0	101.0
文久元(1861)			13.2.0	20.5					156.1.0	36.0

出典)「相続講金現量鏡」各年度(相続講文書)より作成。

注) その他の項目について。弘化3年は、仕法に付借入金。嘉永2年は、政兵衛当座貸付の内内済金。

同3年は、不足に付借入金。同4年は、蔵普請手間代・飯米代加入。同5年は、力三郎仕法に付預り金。

同6年は、蔵建替に付下蔵売払代。安政3年は、力三郎仕法預り金・利子預りと大沢橋普請に付寄付金の合計。

同5年は、字もちりせき林真木売払代。

表-18 相 続 講 支 出

	無尽掛金		田地買入代		年貢皆済		米買入代		田地買入金貸付	
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
弘化3(1846)										
〃 4(1847)					3.2	124.8	2.1.0			
嘉永元(1848)					2.0	8.7				
〃 2(1849)					3.2	42.1	1.1.0	20.1		
〃 3(1850)			3.3.0		1.0.0	113.1	2.0			
〃 4(1851)			10.0.0		3.0	70.4	1.2	48.3		
〃 5(1852)					1.0.2	78.1			19.1.0	57.4
〃 6(1853)			3.2.0		1.0.0	95.9				
安政元(1854)			29.0.0	49.2	1.1.2	36.8				
〃 2(1855)					1.1.2	45.8			6.3.0	
〃 3(1856)	2.2.0				1.1.2	51.5				
〃 4(1857)	2.1.0		82.2.0		1.0.2	46.6				
〃 5(1858)	5.1.2	12.6			1.0.2	63.9				
〃 6(1859)	3.1.0				1.2.3	62.9			37.2.0	
万延元(1860)	3.1.0				2.0.0	102.2				
文久元(1861)	3.1.0				2.1.0	8.4			42.3.2	
	利 付 貸 付 金		無 利 貸 付 金		そ の 他		合 計			
	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永	両・分・朱	永
弘化3(1846)			48.0.2	77.0					48.0.2	77.0
〃 4(1847)	20.0.0		2.2		4.3.2	48.8			28.3.0	48.6
嘉永元(1848)			12.1.2	56.8		49.2			12.3.2	114.7
〃 2(1849)			13.2.0	81.2	1.1.0	72.9			17.0.0	91.3
〃 3(1850)	10.0.0		18.1.0	71.5	2.3.2	29.8			36.2.0	89.4
〃 4(1851)			15.2.0		3.3.2	109.1			30.2.2	102.8
〃 5(1852)			7.0.0		13.3.2	98.7			41.1.2	109.2
〃 6(1853)	4.3.0		15.2.0			78.1			24.3.2	49.0
安政元(1854)	8.0.0		12.0.0		1.3.0	11.5			52.0.2	97.5
〃 2(1855)			24.0.0		9.1.2	24.9			41.2.0	70.7
〃 3(1856)			18.1.2		16.3.2	46.5			39.0.2	98.0
〃 4(1857)			10.0.0		8.1.2	34.6			104.1.2	81.2
〃 5(1858)			12.0.0		3.0.0	95.2			21.2.2	46.7
〃 6(1859)					1.0.1	6.2			43.2.0	69.1
万延元(1860)			13.0.1	83.0	2.0.2	117.3			20.2.3	52.5
文久元(1861)	40.0.0		30.0.0		1.3.3	16.8			120.1.1	25.2

出典) 表-17と同じ。

注 その他の項目について。弘化4年は、弘化3年借入金と同利足。嘉永2年は、石代金納諸費用と風祭・地神講他。
 同3年は、大山代参路用・施餓鬼他。同4年は西の沢入用・蔵普請・地神講他。
 同5年は、西の沢入用、嘉永3年借入金返済と同利足他。安政元年は西の沢入用と地神講他。
 同2年は嘉永5年力三郎預り金返済・異国穀割合・地神講他。同3年は、伊助信友講脱退ニ付引請・大沢橋普請他。同4年は、萩蕪永助助成他。同5年は、みつまた苗買入と植付人足代他。
 同6年は、地神講他。万延元年は、みつまた苗・杉苗買入と植付人足代他。
 文久元年は、地神講、杉苗買入他。

表-19 相続講無利貸付金,

		弘化3		同 4		嘉永元		同 2		同 3		同 4	
1. 市郎右エ門	借用返済	2.0.0								4.0.0			
2. 平吉後家	借返	1.3	35.7	同 左		〃		〃		〃		1.0.0	85.7
3. 饑左エ門	借返			3	43.7		46.2	同 左		〃		〃	
4. 五郎右エ門	借返	6.0.0		1.2	87.5			4.2.0					
5. 宗兵衛	借返	3.1	44.6	同 左		3.2	74.6	同 左		1.3.0	99.6	同 左	
6. 与兵衛	借返	6.3.2		同 左		〃		〃		10.0.0		2.1.2	35.6
7. 七兵衛	借返	3.3	44.6	同 左		〃		〃		〃		〃	
8. 市左エ門	借返	3.0.0		同 左		〃		〃		〃		〃	
9. 治兵衛	借返	1.2	53.5	同 左		〃		〃		〃		〃	
10. 熊次郎	借返	3.1.0		2.2.2	87.5	2.2.0							
11. 武兵衛	借返	1.2	89.2	同 左		1.0.0	6.7	1.2.0	6.7	同 左		〃	
12. 善右エ門	借返			1.2	87.5		1	30.0	同 左	〃		〃	
13. 松右エ門	借返	2.1.0		4.0.1	25.0					〃		1.2.0	
14. 政兵衛	借返	1.0	71.4	同 左		1.0.2	13.9	同 左		〃		〃	
15. 太右エ門	借返	1.0.0		1.2	87.5					〃		〃	
16. 伊助	借返	2	17.4	同 左		3	47.8	同 左		〃		〃	
17. 嘉助	借返	1.0	77.0	3	43.7	1	30.4	同 左		〃		〃	
	借返		46.7	同 左						〃		〃	
	借返												
	借返	5.1.0		1.2	87.5	6.2.3	46.7					2.0.0	
	借返	3.0		同 左		3.1	30.0	1.3.0	50.5	同 左		〃	
	借返	4.3.2		1.3.2	56.8							5.0.0	
	借返	2.2	53.7	—		2.3	40.1	1.0.3	19.3	—		5.3.3	15.8
	借返	3.1.0		1.2	87.5	7.3.0	71.5					〃	
	借返	1.2	89.2	同 左		2.0	56.7	2.0.1	58.5	同 左		〃	
	借返	5.1.0		1.2	87.5	2.3.0		2.3.2					
	借返	3.0		同 左		3.1	30.0	1.1.1	80.0	1.3.3	30.0	同 左	
	借返	5.0.0		1.2	87.5	2.2.2				3.0.2			
	借返	2.2	89.2	同 左		3.0	56.7	1.0.2	6.7	同 左		1.3.0	6.7

出典) 表-17と同じ。

の特徴をみていきたい。先にみたように、弘化3年は報徳仕法中止の年であり、相続講も弘化3年を境として、前にみたような作徳米を18軒で分配するという形の講ではなく、「去ル寅年(天保13年)より夫食米其外金貸取調一統相談之上無利七ヶ年賦貸付仕候事」⁶²⁾と

でしかない。明治18年の「竜報徳社再興緒言および仮規則」(『市史』5巻, 420頁)には、「然ル処置々(ミカ)置キ被仰出タルニ付、加入金残ラズ返済シ土台金ヲ残シ預ケ置タル金額今年ニ至リ元利金百四拾円三拾三銭九厘ニ増益ス、仍テ此金額ヲ土台トシテ今般報徳社ヲ再興スルモノナリ」とあり、何らかの形で運用されてい

借 用 と 返 済

(単位、両・分・朱・永)

同 5	同 6	安政元	同 2	同 3	同 4	同 5	同 6	万延元
1.0.0 同 左	2.0.244.0	3.050.0	同 左	"				1.0.0
1.0 "	1.317.0 1.071.2	94.6	90.0	同 左	"	"	"	3.2.0
1.1.0 "	10.1.317.0 "	2.3.357.7	同 左	2.0.090.0	同 左	"	"	
3.0 同 左	3.0.348.1	1.1.253.5	3.0 同 左	1.2.253.5	同 左	"	11.0.345.3 150.3	6.0.0 2.0.345.3
"	"	8.0.0	1.1.0	1.0.2	同 左	"	"	6.0.0 1.0.2
3.2.0 "	1.317.0 2.0.281.7	1.0.144.6	3.0.2 3.040.0	1.1.240.0	同 左	"	2.290.0	17.3.2 2.2
7.0.0 "	1.317.0 1.1.355.0	1.1.357.1	1.1.352.5	同 左	"	"	90.0	16.2.0
"	1.317.0 "	1.219.6	3.0.0 1.215.0	1.0.215.0	同 左	3.2.265.0	9.0	1.0.0
"	1.317.0 "	132.1	90.0	同 左	12.0.0 "	3.0.090.0	2.1.090.0	1.0.0 2.1.0
1.0 "	1.317.0 1.155.4	10.0.0 132.1	2.0.090.0	同 左	"	"	"	1.0.0 2.0.0 1.0.0
2 2.0.313.0	1.317.0 2.1.125.5	6.0.0 1.1.277.6	2.0.148.0	同 左	1.0.090.0	2.265.0	同 左	10.0.0 2.137.5
1.0 1.0.0	1.1.025.0	3.0.0						1.0.0
"	2.1.317.0 "	2.0.058.9	1.352.5	5.0.0 同 左	1.1.352.5	同 左	1.3.237.6 "	4.0.0 1.1.237.6
2.2 "	1.317.0 2.2.230.0	1.0.194.6	3.0.0 2.240.0	1.0.090.0	同 左	"	1.390.0	1.0.0
1.0 同 左	1.3 2.0.031.7	1.0.044.6	7.3.2 2.290.0	1.3.090.0	1.2.090.0	同 左	"	1.2.0

あるように、無利貸付を目的とした報徳仕法とはほぼ同様な役割をはたしていくようになる。

これ以後、弘化3年から嘉永7年までは、竈新田村の報徳仕法と並行しておこなわれているが、弘化3年以後は、五郎右衛門が嘉永4年に6両の無利貸付金を借りている以外は

和新田の農民は報徳仕法との結びつきはみられず、相統講に移っていったものとみられる。

たものと思われる。

62) 「相統講金現量鏡」35番、弘化2・11～弘化3・10、相統講文書。

63) ここでは、米の運用についてはあつかっていない。別稿を用意したい。

そこで、ここでは和新田を中心とする相続講がどのような役割をはたしていったのかをみていきたい。

まず、収入の部からみてみよう。表-17をみると、米の売払代と利付貸付金の返済と無利貸付返納金が主要な収入源となる。今まで、小作地からあがった作徳米は和新田中18軒で配分した残りを売却していたが、天保14年以後和新田中への割米はなくなり、すべて売却されるようになる。そして、弘化3年からは米も無利夫食米貸付として運用されるようになり⁶³⁾、残米は売却によって相続講の収入源となっていく。利付貸付返納金は、他村に貸し付けられる場合、1割2分の利率で貸し付けられており、その収入である。無利貸付返納金は、和新田18軒に対し貸し付けたものであるが、これも報徳仕法と同様に決して無利子ではなく、冥加元金として返済後もう一年分支払うという形をとる。また、ここでは、前半期(弘化2年まで)と比較して無尽による資金の運用が減っており、安政4年に25両の落札があったにすぎない。田地代返金は、相続講で購入した土地をもとの所持者が請け戻したものと、相続講で田地代を借りながら維持できずに土地を手離して相続講に返却したものと二種類あるが、文久元年の141両は、安政4年に下宿の平左衛門の土地を相続講で購入した82両2分と、安政6年に和新田の市左衛門が37両2分を相続講から借りて土地を購入したものの維持できず土地を手離して返却したものなどを含む。

次に支出であるが(表-18)、その主要なものは無利貸付金である。これがどのように運用されているかを示したのが表-19である。弘化3年から無利貸付がおこなわれるのであるが、この借入れが何によるものか不明である。しかし、表-16の「取穀取調一覧」をみると、18軒全部がわかるのではないが、弘化元年の段階で1番の市郎右衛門は借用金が2両2分で無利貸付金が2両、3番の儀左衛

門は借用金が3両で無利貸付金が6両、以下4番の五郎右衛門が借用4両1分で6両3分2朱を借り、5番の宗兵衛は借用が3両3分で3両を借り、6番の与兵衛は借用が1両2分3朱で3両1分を借り、9番の治兵衛は1両の借用で1両を借り、13番の松右衛門は3両1分の借用で5両1分を借り、15番の太右衛門は1両2朱の借用で3両1分を借りている。借用金の額と無利貸付金の額とはかならずしも一致しているとはいえないが、やはり借用金返済を目的とした借入れといえないだろうか。その後も、18軒の住民は——実際には何軒かの潰があるが——何回か借入れをくりかえしており、各家の経営状態は不明であるが、後にみるように各家とも所持石高が5石未満であり、決して安定した経営とはいえず、むしろ借入れをくりかえすことによって経営の維持をはかっていたのではないかと思われる。結局、無利貸付は各家の経営の維持をはかるための家計補助的な役割をはたしていたのではないだろうか。

次に、利付貸付は、先にも述べたように他村の場合には12%の利子をとって貸し付けている。これはすべて新橋村の農民である。

田地買入代については、小作地の購入にあてられており、嘉永3年には竈新田の字古平畑を3両3分で、嘉永4年には杉名沢村の孫次郎から10両で、同6年には竈新田の字もちりせき田畑を3両で、安政元年にはやはりもちりせき荒地を29両で、同4年にも字瀬戸沢田地を82両2分で購入している。この中で興味深いのは、以前報徳仕法の時に不定年賦で平兵衛が借り入れて開発された西の沢田地5畝28歩を「字西之沢と申所、此度開発仕一統相談之上、年々寄合作り仕、相続の為御土台田地に備置候事」⁶⁴⁾とあるように、相続講土台加入田地として相続講の共有として寄合作り、つまりは共同の耕作地としていることと

64) 「相続講金現量鏡」37番。弘化4・11～嘉永元・10、相続講文書。

表一20 田地買入金借用者

(単位、両・分・朱・永)

人 名	時 期	借 入 金		地 名
平左エ門(宿)	嘉永5	3.0.0	57.4	字五丁田
力三郎	〃	16.1.0		流れ田、徳米2俵半・金1分
竹次郎	安政2	6.3.0		荒れ畑3カ所、徳金1分2朱
市左エ門	〃 6	37.2.0		せと水□畑、四辻荒畑他→文久元年差戻し
五左エ門	文久元	15.3.2		市左エ門家下(無利5カ年賦)市左エ門が購入
七兵衛	〃	15.2.0		〃 (〃) 〃
久次郎	〃	2.2.0		四辻荒畑(〃) 〃
力三郎	〃	9.0.0		武兵衛田地 (〃)

出典) 表一17と同じ。

あわせて、字古平畑ともちりせき畑も寄合作りとしている点である。

次に、田地買入金貸付は、先の当村の報徳仕法ではみられなかったものである。表一20をみるとわかるように、基本的には和新田住民に貸し付けられており、このうち市左衛門は安政6年に37両2分を借りて3カ所の田畑を購入したが、文久元年には五左衛門(与兵衛事)・七兵衛・久次郎(平吉事)へそれぞれ売却しており、結局相続講から借りた田地買入金のうち33両3分2朱を返却し、かわりに相続講は3人にそれぞれ5カ年賦で田地買入金を貸し与えている。ここでは、宿の平左衛門を除き、和新田内で6人の者が田地買入金を借用しているが、毎年作徳米・金という形で小作米を相続講に納めており、いつの時点で本人のものとなったか不明である。

最後に、その他の項目をみておきたい。その他の支出では、地神講や風祭などの地域的な諸活動の費用の他に、安政2年には異国船割合や、同3年には大沢橋の普請費用など村入用にあたる費用も支出の対象となっており、また畑に植える三桎苗などの共同購入もおこなわれ、貸し付けとしての機能だけでなく、しだいに和新田地区全体の共有金的な性格をもつようになっていく。

このように、報徳仕法が弘化3年以後、しだいに終息にむかうようになると、相続講は形をかえ、それにかわって和新田を中心とした金融機関としての役割をはたすようになることがわかった。その結果、小林家と和新田住民との関係はどうなっていくのであろうか。表一21は、安政元年(1854)の小林家と小作人との関係を示すものであるが、これをみてもわかるように、相変らず和新田の12軒が小林家の小作人であり、合計80俵1斗4升のうち約47俵が和新田の農民から納められている。また、畑小作においても、約7両3分のうち約4両1分が和新田の農民らによって納められており、先の表一14の天保12年段階と比較してほとんど変化がない。そのことは表一22からも示されるだろう。明治3年における所持石高を示したものであるが、ここでも47石余の小林家(18番)を除いて全部が5石以下であり、相変らず小林家の小作人としての地位にとどまっていたであろう。それに対して、小林家はようになっていったのであろうか。残念ながら、その時期の小林家の経営を示す史料はないのであるが、安政3年(1856)には上宿の庄兵衛から1反11歩の田畑を10両で購入し、明治元年には和新田の嘉助から2反3畝歩の土地を15年季で270両(史料のまま)

表-21 小林家小作人一覧(安政元年)

人 名	田 方	畑 方	
	俵・斗・升	両・分・朱	銭・文
1. 藤兵衛(市郎右エ門倅)	7.0.0	1.3	1900
3. 儀左エ門	5.2.0	1.3	
4. 五郎右エ門	4.0.0	3.3	400
5. 宗 兵 衛	1.1.0	1.0	400
6. 与 兵 衛	5.0.5	2	1200
7. 七 兵 衛	2.2.0		
8. 市左エ門	4.0.5	2	500
9. 治 兵 衛	2.1.0	2	1550
10. 金左エ門(熊次郎倅)	1.2.0	1	
13. 源次郎(松右エ門倅)	2.3.5	1	650
15. 太右エ門	1.2.6		
16. 伊 助	9.0.8	2.2	500
小 計	46.3.9	4.0.3	700
伊 八(払)	6.0.5		1200
惣左エ門(//)	4.3.5	2	200
安右エ門	1.2.0		
九 兵 衛(宿)	4.2.0		
伝左エ門(//)	4.0.0		
七左エ門	7.0.0		
仁兵衛(小林家下男)	2.5	2	200
久右エ門	3.3.0	1.0	300
徳 兵 衛	1.0.0		
元 兵 衛			700
喜兵衛(忠右エ門倅)		2.0	
河右エ門			300
平右エ門(中清水)		2.0.0	372
小 計	33.1.5	3.2.0	72
合 計	80.1.4	7.2.3	772

出典)「田畑小作金取調帳」(補259)より作成。

注 小林家手作, 9 俵。1 両 = 6 貫400文で計算。この年7分5厘から1割の不作引があるが含めなかった。割作の場合は均等に割った。

で購入しており⁶⁵⁾、天保7年に平兵衛がのべたような「暮方必至与差詰」のような危機は去ったと思われる。その後、小林家は大正3年(1914)には、30町歩の大地主に成長している⁶⁶⁾。

以上みてきたように、竈新田村では報徳仕法が事実上終息にむかうと、和新田地区を中心に相続講がそれを引き継ぐ形で仕法を継続

65) 「田畑控」補131。

66) 筒井「前掲論文」66頁。

表-22 明治3年所持石高

人 名	石・斗・升	
1. 市郎右エ門	不 明	
2. 平 吉	6.2	つぶれ再興
3. 儀左エ門	1.2.7	
4. 五郎右エ門	2.4	
5. 宗 兵 衛	8.3	
6. 五左エ門	8.6	
7. 七 兵 衛	9.3	
8. 市左エ門	不 明	
9. 治 兵 衛	1.8.3	
10. 熊 次 郎	2.8	
11. 武 兵 衛	5.6	
12. 善右エ門	4.8.4	つぶれ再興
13. 松右エ門	3.4	//
14. 政 兵 衛	2.9	//
15. 太右エ門	3.3.3	
16. 伊 助	1.1.6	
17. 嘉 助	1.7.3	
18. 惣右エ門(平兵衛)	47.8.3	

出典)「明治3年宗門人別帳」(竈区有文書・村制267)より作成。

注 合以下切り捨て。人名は藩政時代のものを使用。

していることがわかった。だが、それは農民の自立をうながすというよりも、実は小林家に従属させるという形でのものでしかなかった。その理由として、本来、報徳仕法が農民の分度を設定し、余剰を蓄積するといっても、小林家以外の農民たちにとっては困難なことであったにちがいない。なぜなら、他の農民たちにとっては、年貢や小作料の納入によってギリギリの生活を余儀なくされていたのであって、無利貸付によって借金を返済したとしても、また不足分を新たな借り入れによっておぎなうという状態におかれていたのである。結局、農民たちは、相統講から家計補充

のための資金を借りてようやく生計を維持し、小林家は、直接資金を融通するよりも相統講を通じて小作人たちの生計をある程度安定させ、小作米の収入をより確かなものにしていくことによって、小林家の経営を一層強固なものにしていくことが可能となったのである。

その後、明治期に入って相統講はどのようになっているのであろうか。小林家の明治28年の「相統講規則」⁶⁷⁾と題する史料には、第一条に「当講ハ富士岡村竈和新田最寄拾八戸ノ幸福ヲ永遠ニ得ンカ為ニ、十八戸ヲ以テ組織シ、故二宮先生ノ遺法ヲ遵法シ、報徳ノ事

67) 補373。

業ヲ務ムルヲ目的トス」とあって、やはり18軒でもって組織し、報徳の事業をおこなうことをのべている。そして、現在の資本は548円あまりで、粃が179俵、米が2俵、その他田畑山林を2町5反9畝28歩所有し、総金高の半額又は寄金高の半額を年賦または一期返納として貸し付けをおこない(第9条)、貸付金利息や益金の中から必要経費を支払い、「残金十分ノ一以内ヲ以、協議ノ上道路橋梁ノ修理及公共ニ関スル事業ノ費用ヲ補助シ、又ハ天災不幸ノ災害ニ係ル者江救助スル事アルベシ」(第10条)とのべており、それが18軒に対する貸し付けだけにとどまらず、村の財政を補完する役割もはたしていくようである。筒井氏は、竈新田村の共有金穀の運用を検討して「竈村の共有粃・共有金組織は、藩政期以来の系譜をもつが、明治期以降の運用は、単なるその延長上に封建的・共同体的残存物として理解さるべきでなく、明治政府による急速な上からの近代化過程＝地域社会全体の資本主義的再編過程の中で、その新たな社会的機能を担わされて創出されたものと把握されねばならない。」⁶⁸⁾とのべられている。ここでは、明治期における相統講の分析をおこなっていないが、幕末から明治にかけてそれがどういう変化をとげるのか明らかにされなくてはならないだろう。

Ⅳ おわりに

以上みてきたように、報徳仕法は、弘化3年、藩の命令によって完全に廃止されてしまうのではなく、一村仕法という形でのこり、竈新田村の和新田地区では、報徳仕法以前にあった相統講という組織が形をかえながら継続されていくことがわかった。ただし、それは、地主である小林家と大部分が小林家の小作人である和新田住民とのつながりを一層強固なものにするための手段となっていく。報徳仕法の目的が、農村の復興を目的とするものであったとすれば、当村では確かに天保

期における危機的状況を脱し、一応難村的状况は克服されたといえるであろう。しかし、農民の生活は安定しえず、結局は相統講による家計補助的機能にたよらざるをえず、ひいては地主である小林家への依存を強めることになったのである。それは、勿論、小田原藩の分度が確立しなかったという問題もあるが、やはり生産力の発展をもたらすような新たな試み、農業技術の改善や新たな商品作物の開発などによる方向をもたない限り、単なる家計補助的な金融機関としての役割にとどまってしまうのではないだろうか。

最後に、本稿では竈新田村の仕法を対象にしたといいながら、実は、竈新田内の和新田地区にのみ限定されており、報徳仕法が終息したあと、他地区でこうした相統講に類するものがあつたかどうかということは対象とされておらず⁶⁹⁾、今だ不十分といわざるをえない。今後、他地区での仕法の実態を明らかにすることによって、全体の特徴を明らかにしていきたい。

追記、史料の閲覧にあたっては、小林家の皆様、また中村家の皆様には種々便宜をはかっていただき、本当に心から感謝しております。立教大学経済学部逆井先生・同文学部荒野先生の大学院ゼミでは、貴重な御意見をいただきました。十分に生かしきれていないのが残念ですが、ありがとうございました。

68) 筒井「前掲論文」140頁。

69) なお、筒井「前掲論文」109頁に、「嘉永期から慶応期(1850～60年代)にかけて幕末の難村状況下に、村内神社風損木売却金(1852年)・嘉永6年地震の際の小田原藩より下渡金(1853年)・村民月掛による村備金(1857年)・玄清寺運営費積立金(1861年)が、それぞれ村民貸付に供されて運用されてきたものである。この時期竈報徳社は、小田原藩による仕法中止令(1846年)により休社状態におかれていたため、村民は上記のようなさまざまな方法で資金を積み立て、村内金融に用立ててきたのであった。」とのべられており、相統講に類するものが和新田地区以外にもあったように思われる。